新潟県

歴代会長
初　代 師尾　源蔵（昭和24年～）
第２代 鷲尾　吉光（昭和30年～）
第３代 吉田　吉平（昭和36年～）
第４代 吉田六左エ門（昭和62年～）

事務局　〒955　新潟県三条市荒町2-1-8　三条市教育委員会社会体育課内
野水　寛　　TEL 0256-32-5211

〈沿 革〉

協会創立に至るまで

ウエイトリフティングが新潟県にはじめて紹介されたのは、昭和23年（1948）６月12、13日の両日、新潟市越佐自治会館で開催された「国際スポーツ解説講習会」においてである。

この講習会は県内スポーツの先覚者でもあった師尾源蔵によって提唱され、北日本体育文化協会が主催したもので、レスリング、ボクシング、フェンシング、ウエイトリフティングの４種目がこの時紹介された。ウエイトリフティングの講師は、この年第１回全日本選手権大会Fe級で優勝した中島虎男氏（長野県出身）であった。

その後、レスリングの風間栄一氏（現在県レスリング協会名誉会長）のコーチで当時全国最強の高校レスリング選手に重量挙が教えられたり、また講習会の会場になった越佐自治会館では、備え付けの練習器具で新潟進駐の米軍兵士の練習する姿が見られるなど、重量挙の芽が新潟に根づきはじめたのである。

そのような中で、この競技を更に普及発展させるにはきちんとした組織が必要と、翌昭和24年新潟県重量挙協会が創立され、初代会長として師尾源蔵、事務局は新潟市西堀通３村山清吉方におかれ、同時に県体育協会に加盟した。

〈年次別概況〉

昭和24年

新潟県重量挙協会創立。

12月、県重量挙協会、新潟日報社共催「重量挙演技解説会」講師井口幸男氏（当時全日本Fe級選手権者、その後日本ウエイトリフティング協会理事長）、窪田登氏（早稲田大学学生、現早稲田大学教授）、長岡会場は県立長岡高校で、同じく普及まもないフェンシングと同時に行われ、はじめてみる新競技に観衆の興味は大いに沸いたという。

新潟会場は、市内高校レスリングリーグ戦の会場で休憩時間に重量挙の実技指導が行われ、腕に自信の一般ファンも飛び入り参加し、その中で玉木秀雄（新潟市・小野鉄工所）が優秀選手として表彰された。

昭和25年

県体育指導者講習会。主催県教育委員会社会体育課、講師井口幸男氏。

湯沢温泉の小学校を会場に、指導者を対象とした講習会を実施した。

昭和26年

第６回広島国体へ玉木秀雄出場。

新潟市の愛好者を中心とした競技レベルも向上し、医博石浜文郷、矢野孝（新潟市立工業高校）、鷲尾吉光のスタッフと共に、手さぐりながらの練習を重ねた結果の県内初の国体出場であり、これを契機に本県ウエイトリフティング界も国民体育大会、全日本選手権等を身近な目標とするようになる。

昭和29年

理事長に長谷川重造（新潟市・長谷重スポーツ）を選出。

第３回県民体育大会、M級優勝梅沢俊夫（新潟市・日吉通商）T312.5kg県新記録（現在の所、県内の記録として残っている最初の新記録）。

昭和30年

神奈川国体、M級３位梅沢俊夫。

県協会創立以来、初めて国民体育大会入賞者が誕生。

昭和31年

兵庫国体、L級５位羽賀富男（第一印刷）、M級４位梅沢俊夫（日吉通商）。

昭和32年

静岡国体、L級７位羽賀富男、M級５位梅沢俊夫。

昭和33年

富山国体、L級７位羽賀富男。

この時代活躍した選手は、羽賀の他にコーチとして福田克彦（第一印刷）、F級野口時雄、B級山田定吉（山田鉄工）、Fe級武石輝成、M級小熊秀雄、LH級金井二郎（画家）があげられる。

昭和34年

東京国体、L級４位羽賀富男。

昭和35年

新潟国体実行委員会（黒埼村）発足。委員長森清太郎（黒埼村総務課長）、次長宗村栄助以下スタッフ70名という村をあげての取り組みであった。

昭和36年

第３代県協会会長に吉田吉平（県議会議員）を選出、事務局長宗村栄助（黒埼村教育委員会）。

ローマ・オリンピック重量挙選手団帰国報告会（会場黒埼中学校体育館）。

飯田監督（法政大監督）以下銀メダルの三宅選手他４名の日本代表選手が演技。

三条重量挙協会創立。黒埼村での帰国報告会の帰途、三条市でもその模範演技を披露してもらう為、急遽協会を設立、会長渡辺行一（三条市立図書館長）。

この頃、市内神明神社の祭りでは境内で力自慢大会が行われ、大いに賑わったという。

第21回全日本選手権大会開催（会場黒埼中学校体育館）。

昭和37年

新潟商業高校全日制・定時制に重量挙部創立、同時に県高体連加盟。専門部長太田浩（県立新潟商業高校長）、委員長渡辺力（新潟商・全日制）、委員久我寛（新潟商・定時制）。

明治大学重量挙部、黒埼村で合宿（これが縁で、翌年同大学卒業の４選手が新潟県へ就職、県代表として国体に出場することになる）。

岡山国体、黒埼村より視察団を派遣。Fe級７位羽賀富男。

昭和38年

審判講習会（会場新潟市立寄居中学校）。県内ではじめての講習会、当時まだ判定燈もなかったため、赤と白のセルロイドの下敷で判定を表示し、実技の勉強をしたという。

全国高校総体（徳島市）F級７位大野武（新潟商定時制）。本県高体連として初めての出場、新潟商全日制３名、定時

制3名、白山1名、新潟明訓1名の8名からなる選手団。全国高校総体遠征途上、明治大学で調整合宿を行い、1日をオリンピック日本代表チームの合宿練習に参加させてもらう。
安塚高校牧分校重量挙部創設。顧問水沢昭雄。中京大学で重量挙を経験した水沢が創設。
三条工業高校重量挙部創設。顧問長井孝平。三条協会創立に関係した長井が新設の男子校だからと働きかけた。
山口国体、Fe級3位荒木剛(黒埼村体協)。

昭和39年

当時、全国最強の明治大学より荒木、山口、鈴木、阿部の四選手が相ついで黒埼村体育協会、国体事務局に就職。地元黒埼村、新潟市の選手を加え新潟国体に向けた選手団の陣容がととのってきた。強化合宿は主として黒埼村緒立温泉を宿舎にし、黒埼中学の一角に建てられた黒埼村立の重量挙練習道場で練習が行われた。昭和39年に入ると長期休暇だけでなく、土日合宿も頻繁に行われ、村民や隣接の中学生が多数応援に訪れるなど気合も入って、その熱気は頂点に達した。
6月7日新潟国体ウエイトリフティング競技開幕(会場黒埼村立大野小学校体育館)。天皇杯総合5位(天皇杯得点3.5点)、一般総合3位、一般F級5位大野武(県体協)、B級5位鈴木国貞(自営)、Fe級4位荒木剛(県体協)、L級優勝山口隆弘(黒埼村体協)397.5kg日本新、P122.5kg大会新、LH級2位鈴木孝久(県国体事務局)405kg大会新、MH級2位阿部正善(金門製作所)、高校F級7位横村一夫(新潟商定)、B級6位小川芳二(白山)、Fe級5位安藤正一(新潟商定)、L級5位水落正彦(新潟商)。この年、東京オリンピックが10月に開催されるため、国体は6月に行われた。まさに全国と県内に大スポーツイベントが開催されるという熱気の中で、開催県が天皇杯を獲得するという史上はじめての快挙に、当協会も貢献する事ができた。

昭和40年

全国高校総体県予選会(高体連主催ではじめて開催)団体優勝新潟商定時制。他に新潟商全日制、白山、安塚牧、三条工の5チーム、32選手が出場。
新潟商の生徒玄関にプラットフォームを設置し、生徒の下駄箱の間にはさまれて試合した草創期の思い出である。
全国高校総体(大分、湯布院町)。F級3位羽深博一(安塚牧)、B級優勝安藤正一(新商定)。誕生まもない本県高体連専門部で、さっそく初めての優勝者を出すことができた。
岐阜国体(土岐市)、一般総合7位、一般B級優勝鈴木国貞(黒埼村体協)、MH級阿部正善(金門製作所)。高校、一般合同の夏季強化合宿(会場黒埼村公民館)を行い、以降毎年恒例となる。三条工業高校顧問、この年新卒で赴任の中村節夫就任。三条市重量挙協会理事長渡辺末五(酒井鉄工所)就任。

昭和41年

全国高校総体(青森・黒石市)B級2位羽深博一(安塚牧)。
大分国体(湯布院町)天皇杯総合7位(天皇杯得点2点)、一般総合4位、一般F級4位阿部高一(明治大)、B級4位鈴木国貞(黒埼村体協)、LH級7位鈴木孝久(黒埼村体協)、H級2位阿部正善(金門製作所)。

昭和42年

埼玉国体(羽生市)、一般F級優勝阿部高一(明治大)。

昭和43年

全国高校総体(広島・府中市)、F級8位石丸栄一(三条工)。

昭和44年

全国高校総体(群馬・藤岡市)F級5位石渡秀美(新商)、B級6位石本孝行(新商定)、Fe級8位佐野健治(新商定)。
長崎国体(松浦市)、一般F級2位阿部高一(明治大)、Fe級7位鳴海丈支(新潟市教委)、M級6位徳橋政実(早大)。

昭和45年

全国高校総体(和歌山・串本市)。B級7位金子隆(三条工)。岩手国体(江刺市)、一般B級7位鳴海丈支(新潟市教委)、L級5位徳橋政実(早稲田大)。

昭和46年

県協会理事長宗村栄助(黒埼村教委)就任、高体連委員長久我寛(新潟商)就任。
全国高校総体(徳島・鴨島町)学校対抗8位三条工、B級3位古沢慎一(三条工)。高校生を中心に初の県外遠征(福島・いわき市)を実施し、高校の国体ブロック予選通過、本国体高校・一般で総合上位入賞を目指したが惜しくも成らなかった。
和歌山国体(串本町)、一般総合7位、一般F級2位阿部高一(福田組)、Fe級4位鳴海丈支(新潟市教委)、L級7位徳橋政実(自営)。
この時代活躍したその他の一般選手として福田三男(自営)、大野武(日本大)、今井耕治(明治大)、高橋明(早稲田大)、鵜藤清貴(明治大)、伊藤良二(大阪商大)、がいる。
昭和45年から昭和47年にかけて、吉川高校が秋季大会団体優勝、全国高校総体に個人出場するなど活躍した。

昭和48年

この年からPを廃止、S、Jの2種目となる。
春、三条工県外遠征(中央大学)。
第1回北信越高校選手権大会(福井)、団体優勝三条工(以降、同校は昭和57年まで7回の団体優勝をする)。
全国高校総体(三重・亀山市)、L級2位金井峰雄(安塚牧)、M級6位日黒正男(三条工)。
国体ブロック予選(金沢市)、ブロック予選が東海北信越から北信越より1県となって3年目にあたる。前2年とも惜しい所で富山県に敗れている本県が遂にブロック代表となって、地元開催の新潟国体以来10年ぶりに国体出場権を得る。「長い間試合をみてきたが、あんなに一試技毎に一喜一憂、スリリングな試合はなかった」と今でも関係者は言う。
千葉国体(船橋市)、天皇杯総合4位(天皇杯得点4点)、高校総合2位、高校F級4位小林寛(三条工)、Fe級5位渡辺一晴(三条工)、L級2位金井峰雄(安塚牧)、M級2位日黒正男(三条工)、LH級3位田中一(新潟商)。「金井、田中の2人の3年生と三条工の2年生3人を加えた各校のエースからなる選抜チームは、階級のバランスもチームワークも良く理想的なチームだった」と監督の久我は言う。

昭和49年

高体連委員長中村節夫(三条工)就任。
全国高校総体(福岡・北九州市)、学校対抗3位三条工、F級優勝小林寛(三条工)L級7位大塚久良(安塚牧)M級2位日黒正男(三条工)。学校対抗は、強豪金足農(秋田)、新鋭明石北(兵庫)の3校の競い合いの中、伝統の秋田が優勝、惜しくも涙を呑んだ。
国体北信越ブロック予選を三条工で開催。新潟国体以来初めての県外選手の参加する大会、施設・設備がなくて大変苦労した。茨城国体(北茨城市)、天皇杯総合5位(天皇杯得点4点)、高校総合2位。高校F級優勝小林寛(三条工)、B級6位棒正直(三条工)、L級優勝日黒正男(三条工)、S117.5kg日本高校新、M級3位渡辺一晴(三条工)、LH級7位大久保義春(三条工)。新潟日報紙上「静かな闘志の男」と評された日黒は、S第一、第二試技とも慎重にクリアー、第三試技一気に7.5kgあげて117.5kgの日本高校記録にいどむ。思いきって頭上に引きあげたあと、経験

の無い重量に身体全体が沈み込むが、グッと踏んばって見事成功、遂に県内選手初の日本高校記録を樹立する。

昭和50年

全国高校総体(山梨・山梨市)学校対抗5位三条工、Fe級6位斉藤成基(三条工)、M級4位松尾謙資(三条工)。

三重国体(亀山市)、少年L級優勝松尾謙資(三条工)。

第1回Jr世界選手権大会(フランス)、52kg級4位小林寛(中央大)。初めての世界大会、惜しくも銅メダルは成らなかったが、ようやく世界を舞台に活躍する選手がでてきた。

県記録、県高校記録、各大会記録を制定。高校の全国レベル到達を機に過去の全公式大会の記録を整理し、1年の準備期間を経て制定、大会プログラムにも必ず掲載する事とする。

昭和51年

第1回新潟・山形高校定期戦(会場山形荘内農)他県の強豪チームに学ぼうという選手強化策の1つとして始まり、以降毎年交互に会場を担当し続く。

結局この年、全国高校総体は山形(羽黒工)、国体少年は新潟が優勝した事を考えると、まさに的を得た強化対策であった。

全国高校総体(長野・豊科町)、学校対抗4位三条工、B級新井克治(三条工)、LH級優勝小鳴栄二(三条工)。

佐賀国体(有田市)、天皇杯総合2位(天皇杯得点12.5点)。少年総合優勝。成年F級5位小林寛(中央大)、B級8位古沢慎一(自営)、LH級8位目黒正男(中央大)、少年B級2位新井克治(三条工)、M級優勝小鳴栄二(三条工)、LH級7位堀内喜良(三条工)。

この年から、国体の種別と選手数が成年4名少年3名となり、高校のブロック予選は廃止、両種別とも本大会へ出場可能となる。

遂に国体の少年総合で優勝を飾る快挙の年となった。三条工の3選手の活躍が連日新聞紙上を賑わし、大量点獲得の結果、本県が天皇杯総合で中位へ躍進するもととなった。優勝の小鳴は、全国高校総体・国体とも6試技成功、自己新記録による逆転優勝という神がかり的な活躍であった。

昭和52年

第5回北信越大会(会場三条工)、4回目の団体優勝をする。

Jr世界選手権大会(ポーランド)67.5kg級松尾謙資(中央大)出場。

全日本選手権大会52kg級3位小林寛(中央大)。

全国高校総体(岡山・高梁市)、52kg級7位大塚克久(安塚牧)、82.5kg級3位堀内喜良(三条工)。

背森国体(平賀町)、成年75kg級8位目黒正男(中央大)、少年75kg級4位佐野利正(三条工)、82.5kg級3位堀内喜良(三条工)。新潟県選手団の旗手に堀内が選ばれ、無事大任を果たす。

昭和53年

理事長鳴海丈支(新潟市教委)、事務局阿久津文雄(三条商)就任。

世界選手権大会(アメリカ)、52kg級8位高橋雅朝(糸魚川高教)、同選手は翌ギリシャ大会にも連続出場。

長野国体(飯山市)天皇杯総合5位(天皇杯得点6.5点)、成年2位。成年52kg級優勝小林寛(中央大)、56kg級4位高橋雅朝(糸魚川高教)、82.5kg級3位目黒正男(中央大)、90kg級3位松尾謙資(中央大)、少年60kg級4位外山久徳(三条工)。

モントリオール・オリンピックF級4位の高橋雅朝(旧姓竹内)が埼玉県から本県に移籍、丁度高体連育ちの大学生が順調に伸びての長野国体で久ぶりに成年が2位、天皇杯総合も5位に入賞することができた。

昭和54年

三条市総合体育館ウエイトリフティング場竣工(以降、ここを会場に県内大会の多数が開催される。)

全国高校総体(兵庫・明石市)、75kg級2位大山徹(三条工)。

宮崎国体(新富町)、成年52kg級2位小林寛(自営)、56kg級8位高橋雅朝(糸魚川高教)、82.5kg級3位松尾謙資(中央大)、少年75kg級4位大山徹(三条工)。

全日本社会人選手権大会(栃木)、52kg級優勝小林寛(同選手はこの大会昭和57年、昭和63年でも優勝)

昭和55年

モスクワ・オリンピック52kg級日本代表に高橋雅朝選ばれる。ここ10年余、全日本のトップを守り、このオリンピックが選手生活の集大成のはずであった同選手にとって、日本の不参加は残念の極みであった。この後、悔しさをぶっつける様に、上海国際大会において日本タイ記録で見事優勝した。

全国高校総体(愛媛・新居浜市)、82.5kg級2位大関義和(三条工)。

栃木国体(小山市)、天皇杯総合6位(天皇杯得点6点)、少年総合2位。成年56kg級2位小林寛(三条市役所)、60kg級5位新井克治(中央大)、少年75kg級優勝佐野彰(三条工)、82.5kg級5位大関義和(三条工)、90kg級2位大関俊晴(三条工)。この年、少年重量級に好選手をそろえた三条工。ところが全国高校総体はまるで不振であった。

その反省と練りに練った練習計画、コンディショニングは見事結実、地元栃木に次ぐ準優勝となり、監督中村の会心の試合となった。

昭和56年

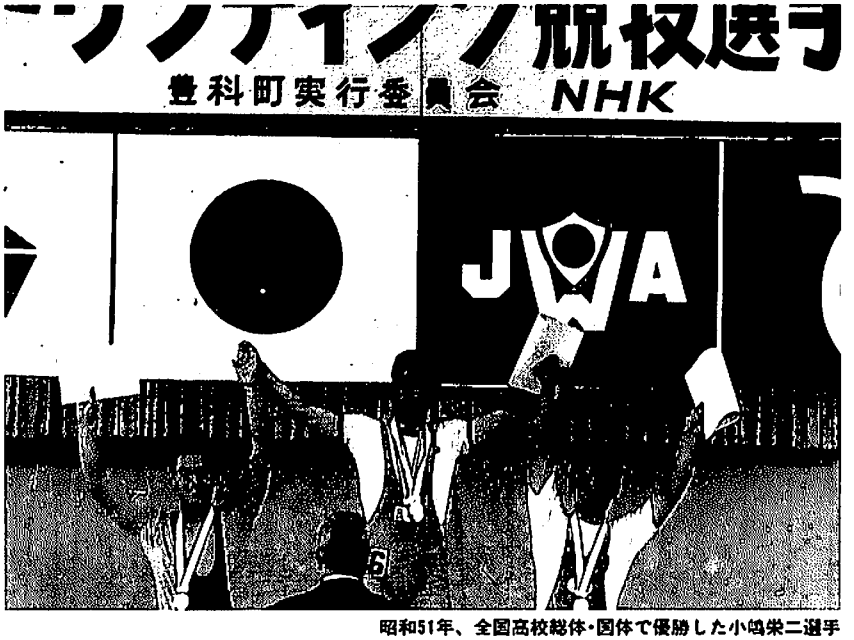
全日本選手権大会52kg級3位小林寛(三条市役所)、60kg級3位新井克治(KK高儀)。

滋賀国体(安曇川町)、成年60kg級4位新井克治(KK高儀)、100kg級8位堀内喜良(中央大)。

昭和57年

第10回北信越大会開催、会場三条市総合体育館。三条工7回目の団体優勝。

世界選手権大会(ユーゴスラビア)、60



昭和51年、全国高校総体・国体で優勝した小鳴栄二選手

kg級新井克治(KK高儀)出場。同選手全日本社会人(群馬)67.5kg級優勝。
全日本選手権大会52kg級優勝高橋雅朝(新潟養護教、全日本選手権通算7回目の優勝)。
全国高校総体(鹿児島・牧園町)、67.5kg級7位山本正男(三条工)。
島根国体(出雲市)成年総合6位、成年52kg級優勝高橋雅朝(新潟養護教)、56kg級7位小林寛(三条市役所)60kg級3位新井克治(KK高儀)、少年67.5kg級8位山本正男(三条工)。
高校県外遠征(日本体育大)。
新潟県体育協会50年史発刊(ウエイトリフティング協会編執筆中村節夫)。
県体協50年史発刊に伴い、苦労して資料を集めた。その中から、田中一(自営)が中心になって集めた国体成績を中村、阿久津がまとめ、以降国体県予選会のパンフレットに掲載している。

昭和58年

ジュニア世界選手権(エジプト)、75kg級佐野彰(中央大)出場。
三条工顧問小鳴栄二(新採用)。

昭和59年

高体連委員長高橋雅朝(新潟北)就任。
新潟北(顧問高橋雅朝)、直江津工(顧問中村節夫)に部創立。
全国高校総体(秋田・大館市)、100kg級2位川瀬和孝(三条工)。
日韓ユース大会(名古屋市)、110kg級優勝川瀬和孝(三条工)。
奈良国体(下市町)、成年52kg級4位小林寛(三条市役所)、60kg級4位新井克治(KK高儀)、少年75kg級6位須佐陸男(三条工)。
高校県外遠征、埼玉栄高校。

昭和60年

採点制競技を実施(夏季合宿時に)。
全国高校総体(石川・珠州市)、100kg級6位関口健(新潟北)。
鳥取国体(岩美町)、成年52kg級2位小林寛(三条市役所)、100kg級3位堀内喜良(新日建業KK)、+110kg級8位川瀬和孝(中央大)、少年67.5kg級5位藤崎俊浩(新潟北)。

昭和61年

第14回北信越大会(会場・新潟北)。
全国高校総体(山口・下関市)、67.5kg級3位藤崎俊浩(新潟北)、90kg級8位阿部良介(三条工)。
山梨国体(御坂町)、成年52kg級3位小林寛(三条市役所)、+110kg級8位川瀬和孝(中央大)、少年67.5kg級2位藤崎俊浩(新潟北)、75kg級6位福田重則(新潟商)。
県高校秋季大会100kg級Sにおいて、関口健(新潟北)が126.5kgの日本高校新記録を樹立。
全日本マスターズ(沖縄)52kg級に加藤康司(三晃堂書店)初出場。

昭和62年

県協会々長に吉田六左エ門(県議会議員)就任。
全国高校総体(北海道・士別市)90kg級5位神田伸磁(新潟北)。
沖縄国体(国頭村)、成年52kg級2位小林寛(三条市役所)、少年56kg6位村山和晃(三条工)。
第1回北信越選抜大会(石川)に県選抜チーム出場、好成績をあげる。

昭和63年

全国高校総体(兵庫・州本市)、学校対抗準優勝新潟北高校、56kg級優勝村山和晃(三条工)、82.5kg級7位中村健三郎(新潟北)、90kg級5位神田伸磁(新潟北)、+110kg2位山田真也(新潟北)。
監督高橋の指導のもと、順調に力をつけて新潟北であったが、あと一歩で念願の全国制覇はならなかった。優勝の日川とは2点差であった。
京都国体(岩滝町)、少年総合2位(天皇杯得点54点)、成年52kg級S2位J2位小林寛(三条市役所)、75kg級S7位藤崎俊浩(日体大)、110kg級S7位関口健(中央大)、少年56kg級S優勝J3位村山和晃(三条工)、82.5kg級S4位・J7位中村健三郎(新潟北)90kg級S2位J優勝神田伸磁(新潟北)。
二巡目国体の最初の年、久しぶり競技力が充実したことと得点方式が変り当種目が有利になった事もあって、県内ではスキーに次ぐ大量54点を得た。
日韓ユース大会(千葉市)、56kg級2位村山和晃(三条工)。
ジュニア世界選手権(ギリシャ)67.5kg級藤崎俊浩(日体大)出場。
新潟工業に部創立(顧問中村節夫)。

平成元年

全国高校総体(徳島・板野町)、82.5kg級3位諸橋弘樹(三条工)。
北海道国体(士別市)、成年56kg級S2位・J7位村山和晃(日本大)、110kg級S3位・J5位関口健(中央大)、少年56kg級J8位町田和道(三条工)、82.5kg級S優勝・J2位諸橋弘樹(三条工)。
三条重量挙協会創立30周年記念式典と記念大会を開催、砂岡良治(ユニデン)、松尾誠資(警視庁)選手を招待。
日本WL協会創立50周年記念表彰。吉田会長以下10名が表彰を受ける。

平成2年

全国高校総体(宮城・村田町)、56kg級8位町田和道(三条工)。
福岡国体(津屋崎町)、成年56kg級S7位・J2位村山和晃(日大)、67.5kg級S4位・J8位藤崎俊浩(日体大)、+110kg級S4位・J6位関口健(中大)、少年56kg級S8位・J7位町田和道(三工)。
新潟県コーチサミット、分科会助言者関口修氏(日体大助教授)来県。
北信越高校選抜合宿(池の平温泉)菊田(珠州実)先生の指導で、韓国式を練習する。

平成3年

石川国体(珠州市)、成年60kg級S6位・J3位村山和晃(日大)、67.5kg級S6位・J6位藤崎俊浩(藤崎建装工業)、+110kg級J5位関口健(中大)。北信越大会(会場三条市総合体育館)。一橋出版社より「筋力トレーニング」発刊、高橋雅朝・小鳴栄二他共著。

平成4年

理事長徳橋政実、事務局野水寛就任。
山形国体(羽黒町)、成年60kg級J3位村山和晃(日大)、+110kg級S7位・J7位関口健(松浜小教)。
新潟北顧問小鳴栄二、三条工顧問大山徹就任。

平成5年

東四国国体(徳島・藍住町)、成年99kg級J8位諸橋弘樹(日本大)。

平成6年

愛知国体(瀬戸市)、成年110kg級S5位・J5位関口健(濁川小教)。

平成7年

世界マスターズ選手権(オーストリア)70才以上54kg級優勝加藤康司。
福島国体(いわき市)、成年+108kg級S8位関口健(自営)。
北信越選抜合宿(新潟工・緒立温泉)。
月2回の週休を使い合同練習を実施。

平成8年

新潟県と中国黒龍江省のスポーツ交流事業により、ハルビン市の体育運動技術学院コーチ郭偉茹氏来県(7月から8月まで滞在し指導)。第1回北信越社会人大会(石川・川北町)で開催。

〈現役員〉

会長	吉田六左エ門
副会長	加藤 康司　鳴海 丈支
	渡辺 末五　阿久津文雄
理事長	徳橋 政実
副理事長	中井 昭夫　野水 寛
	小鳴 栄二　大山 徹
理事	髙橋 雅朝　田中 一
	塩野 髙敏　新井 克治
	倉橋 正弥　片岡 良一
	中村 節夫

長野県

事務局　〒390　長野県松本市県3-6-1　松商学園高等学校内
牛山　成剛　　TEL 0263-33-1210

歴代会長
初　代 吉田　末男（昭和41年～）
第2代 村上　裕史（平成3年～）

〈沿 革〉

協会創立まで

古代ギリシア・オリンピックで、すでに行なわれていたウエイトリフティングは、第7回オリンピックから三種目、体重別の競技となった。その後三宅義信によって国民に強烈な印象を与えたこの競技は、数年間我が国における世界に通用する数少ない種目の一つとして定着した。しかしながら判定が非常にむずかしく時々トラブルを起こすという理由から、日本人の得意であるP競技の廃止で二種目（S、J）になったことにより、我が国のトップが世界から遅れはじめたのである。このころ長野県は、完全実施をキャッチフレーズに国体招致に全力を注いでいたが、そのためには全種目を県内で行わなければならないので、すべての協会を設立する必要があった。このような背景から松本市に長野県ウエイトリフティング協会が創立した。時に昭和41年4月23日のことである。

協会は発足したが、なにもない状態で始めなければならなかったので、まず設備の面から手をつけていった。県営体育館（現在の松本市総合体育館）の地下室に練習場を設け、県からプラットホーム、バーベル一式などが貸与された。数年のちに現在の練習場へ移転をしたのである。また経験者がいないので他県の大学や高校のクラブや各種大会への見学を行った。さらに数回の講習会が松本市教育委員会によって開かれるなど、地道な努力の結果、昭和41年10月に第1回長野県選手権大会を開催した。県ウエイトリフティング協会に保存されている報告書をみると、記録など現在では想いもよらないような数字があり、いかに技術面で低かったかがうかがわれる。またルールの解釈も正しく行われておらず、判定ミスが多かったようである。とにかく輝かしい第一歩が印されたわけで、この陰には故吉田末男会長、故森田徳太郎氏の大変な努力のあったことを忘れてはならない。

〈年次別概況〉

昭和43年

西武石油の古賀弘、自営業の小山悟、本郷村役場の近藤武などを中心に国体参加が始まった。

昭和46年

西武石油の古賀弘、自営業の小山悟、本郷村役場の近藤武、拓殖大学出身の市川秀俊（佐久消防署）、陸上競技から転向した松下電送の飯島久雄が加わり、選手層は充実してきた。さらに丸山製作所の樋口賢一が加入し、勤務の関係から長野県に登録した彼は、市川秀俊と共に本格的な知識と新しい技術を県内に導入、古賀弘によって築かれたレベルをさらに引き上げたのである。このような状況の中で松商学園高校出身の大輪嘉孝（松本郵便局）が国体選手として育ってきた。

昭和47年

長野国体の53年開催が決まり、51年には全国高校総体の開催が決定した。国体向けの競技力向上事業としてまず高校対策が始まった。

昭和49年

飯山北高等学校、上田千曲高等学校、梓川高等学校、南安曇農業高等学校の各校に器具一式が貸与され、強化合宿費なども予算化、この中から上田千曲高、梓川高等学校が福岡で行われた全国高校総体へ本県代表として参加した。

昭和50年

北信越高等学校ウエイトリフティング競技選手権大会を南安曇郡豊科町で開催した。
第12回全日本社会人選手権大会を飯山市で開催した。

昭和51年

全国高等学校総合体育大会を南安曇郡豊科町で開催した。

昭和53年

第33回国体が開催され、少年52kg、上田千曲高校の丸山隆敏、75kg級は梓川高校の前田元春、82.5kg級は飯山照丘高校の吉越進、成年は市川秀俊（52kg級、佐久消防署）、大輪嘉孝（67.5kg級、松本郵便局）、小林孝敏（75kg級、日本通運）石井克宜（110kg級、宮野鉄工）のフルエントリーで臨んだが、石井克宜の7位入賞のみに終わった。

昭和54年

宮崎県で開催された国体に参加し、少年では吉越進（飯山照丘）5位、成年は石井克宜6位、坂井厳司（京都産業大）5位となった。

昭和55年～昭和63年

その後成年は、江波博司（松商学園高出、中京大）ベテラン市川秀俊、大輪嘉孝（松本市役所）、少年は松商学園高が伝統を受け継いできたが、江波博司がT197.5kgで5位（奈良国体）、鳥取国体では205.0kgで6位と2年連続入賞、さらに60年度全日本インカレでも210.0kgで選手権者となり、一躍ソウル・オリンピックの有力候補選手にのし上った。

平成元年～平成5年

平成3年には田中宏樹、籠田浩明、清沢英彦（松商学園）の3人が県大会でそれぞれ優勝、清沢英彦は北信越大会でも優勝、全国高校総体で7位入賞、同年の国体でも7位に入賞した。また、永田真樹（中央大）が全日本学生選手権大会で3位に入賞、大輪嘉孝は全日本選手権大会、全日本社会人選手権大会に出場し、入賞した。
平成4年からは、女子選手が大会に出場するようになり、松本松南高校の選手、篠ノ井高校の選手が参加した。特に、篠ノ井高校の杉本泰美は平成4年、平成5年の2年間、全国大会に参加し、4位入賞した。

平成6年～平成7年

篠ノ井高校が北信越高等学校ウエイトリフティング競技選手権大会において、

学校対抗で3位と健闘した。
個人としては、岩井純徳、塚田和広(篠ノ井高校)など、北信越高等学校ウエイトリフティング選手権大会優勝、国体入賞選手がでてきた。
このように、少年では篠ノ井高等学校、松商学園高等学校、岡谷工業高等学校の3校を中心にして、底辺が拡大しつつあり、また、大学への進学により、ウエイトリフティングをつづける選手も、毎年数名ででくるようになった。
今後も底辺拡大、競技力向上に一層つとめたい。

〈現役員〉

会　　長　村山　裕史
副 会 長　丸林　一富
副 会 長　飯島　久雄
理 事 長　榊原　進哉
強化部長　田中　孝幸
強化部員　市川　秀俊　江波　博司
　　和田　　直　永田　真樹
　　内山　　正　清澤　英彦
競技部長　中山　成剛
競技部員　小松　明雄　小林　康史
　　田中　寛人
事務局長　大輪　嘉孝
監　　事　江波　勝司

富山県

歴代会長
初　代 中川滋次郎（昭和26～）
第2代 石原　茂治（昭和29～）
第3代 椙森　盛光（昭和30～）
第4代 金山　正治（昭和51～）
第5代 古栃　一夫（昭和58～）

事務局　〒936　富山県滑川市北野149
菅沼　義清　　TEL 0764-75-2866

〈沿 革〉

富山県においては戦後、新興スポーツ推進策の一環として、昭和25年第5回の愛知国体に、当時レスリング協会の神保正二、島川幸雄が重量挙競技会を視察して帰った。

同年の12月に神保氏が中心となり富山県重量挙協会設立準備委員会を結成し、翌年の昭和26年3月10日に富山県重量挙協会として、正式に発足した。

初代会長には県レスリング協会兼任で、中川滋次郎が就任した。

〈年次別概況〉

昭和26年度

この年8月の県民体育大会が、県内での初めての公式の試合となった。

広島国体に大西が本県選手として、初めて参加（L級）した。

昭和27年度

神保の勤務先の富山警察署をはじめ、富山消防署、近くの農協にも興味を示す若者達が集まり練習を始めた。

滑川市では島川と同じ、東海電極工場勤務の大西、上田、北川らが手作りのバーベルで、殆ど手探り状態でトレーニングをしていた。

上記三選手が7回福島国体に参加して、開催県の遠藤（元日本協会審判部長）に練習方法等をかなり詳しく習った。

この頃一緒に練習していた室沢が不二越工業で部を作り、活動を始めた。

昭和29年度

滑川高校生も練習を始め、同好会が発足した、また既に33年の富山国体開催も決定しており、準備も進んでいた。

この年より兼任会長ではなく、独自の会長として石原茂治が就任し、氏の寄付で公式バーベルとリンクで試合ができる事となり、大変な喜びだった。

昭和30年度

15回全日本選手権大会を滑川高校で行い、本県より11名の選手が参加し、3名が6位内に入賞した。

この頃より富山商業高校にも同好会が発足し、活動を開始した。

昭和32年度

滑川高校生3名が初めて、北海道での全国高校総体に参加した。

昭和33年度

13回富山国体を開催し、史上初めての民宿となり、地元住民との交流も盛んに行った。成績は苦戦し、MH級稲本が8位に入ったのみだった。

秋田全国高校総体には富山商業も参加し、水産高校生も部活動を開始した。

昭和34年度

11月と35年6月に県内でローマ五輪代表選手の強化合宿を行った。

この頃より富山北部、北日本電波高校も活動しており、試合を消化するのに丸一日要することもあった。

昭和35年度

富山全国高校総体の時、県協会役員（岸、上田、玉木）らの大変な努力により、団体優勝校に高松宮旗を渡す事とし、県東部を中心に募金した。

LH級で中島（富山商）が優勝した。

大学に進学する者も増え、中央大に布村、中島、法政大に石野、岩田らが大学レギュラーとして、また本県選手として国体でも大いに活躍した。

昭和36年度

20回全日本選手権で、若宮F級7位、石野B級4位、高畑Fe級6位、布村M級3位に各々入賞し、好成績を収めた。

昭和37年度

宇都宮全国高校総体でFe級の館田（滑川・定）が優勝、LH級で新村（滑川）が4位に入賞した。

昭和38年度

県内高校生の充実は目覚ましく、館田は北陸三県総体、L級トータルで330kgの日本高校新記録を見事に樹立した。

徳島全国高校総体では予想通り館田、新村とも全国高校新記録を出し楽勝、団体で滑川定時制が7位、全日制が8位に入り大変盛りあがった。

山口国体では勿論2人は1位、F級橋本は5位、B級堀内も5位、M級の須田4位で、高校の部の持点だけで天皇杯第4位の4.5点を獲得した。これは本県協会としては初めての得点であり、また現在に至る迄の最高の成績となっている。

上記二人の高校生は、翌年2月の大会まで競い合って新記録を出しあった。

昭和39年度

東京オリンピックが開かれたが、本県よりの選手出場は無く、競技会役員として椙森、上田、大西が参加した。

土岐市の全国高校総体でB級堀内、Fe級高見ともに惜しくも2位となる。

新潟国体では高校生が全員入賞、一般選手もよく健闘し、天皇杯3.5点を獲得し県別順位で第5位となった。

昭和40年度

国体一般の部で、Fe級の高畑が4位、L級館田3位、M級の須田6位、LH級岩田が3位となり、一般の部の得点だけで第6位となる。学生選手権大会ではLH級で岩田（法大、滑川高OB）が優勝した。

昭和41年度

黒石市の全国高校総体で、竹中（富山商）B級6位、竹田（滑川・定）Fe級3位、江上（滑川）L級で6位に入る。

大分国体一般の部、Fe級で高畑4位、M級の須田8位、LH級で中島6位となった。

昭和42年度

福井全国高校総体で富山商業が団体4位。B級の竹中が5位、LH級で中村も5位入賞した。

昭和43年度

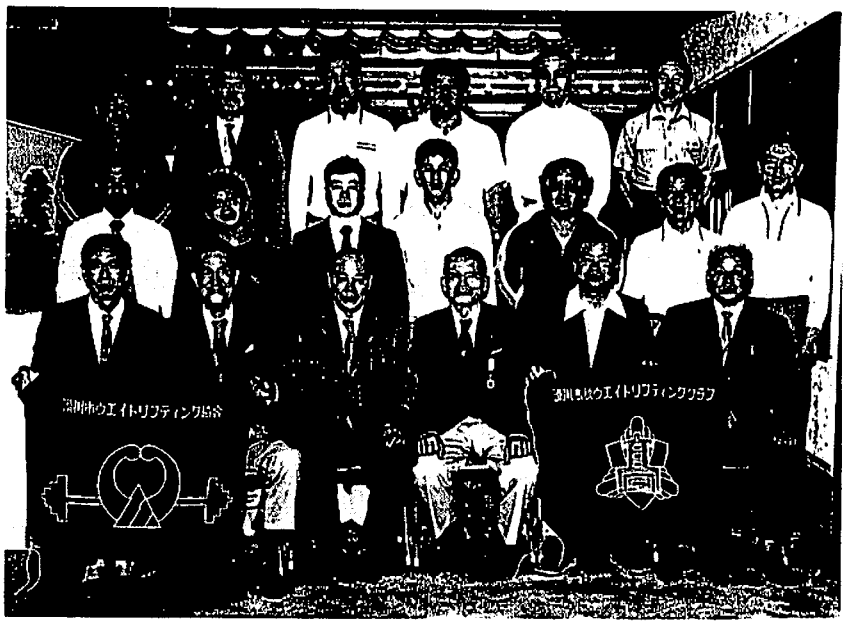
広島全国高校総体で滑川の浦田がM級で優勝。同級で富山商の高田（旧姓吉田）は7位。

昭和44年度

群馬全国高校総体ではFe級で二川（旧姓金山、滑川高→中央大）が優勝した。

昭和45年度

中央大に進学した二川がFe級、高田がLH級でともに、学生新人戦で3位



昭和54年、椙森盛光氏叙勲祝賀会

となった。

昭和46年度

北三大会は高校、一般とも団体優勝。
この年より国体高校の部、ブロック制が東海北信越より北信越に変更になった。

昭和48年度

世界連盟の規約改正により、プレス種目が廃止される。この年より北信越高校選手権大会が始まり、福井県坂井町での第一回大会に、本県より滑川高校、富山商業高校の２校が参加した。

昭和49年度

若松全国高校総体で滑川高校の八倉巻がＦ級トータルで惜しくも２位になる。
茨城国体では高見が、成年のＬ級で４位。

昭和50年度

山梨全国高校総体で滑川の吉川がLH級で３位。
国体の高校出場枠が各県３名となった。

昭和51年度

県内の選手層が一段と薄くなったが、北信越高校で滑川高校が地元でよく健闘し嬉しい初優勝を飾る。
日中友好大会に大商大の田村が出場。
県協会長が椙森より金山になった。

昭和52年

滑川高の山林がLH級で、全国高校総体、国体ともに６位、国体成年のＦ級で八倉巻５位、Ｌ級の高見が６位に入賞。

昭和54年度

約20年県協会長、又日本協会理事として多大の功績を残した椙森が叙勲の栄に浴し、祝宴を開いた。
北信越高校大会で富山商業が団体優勝。
上田、大西が県体育協会より、永年にわたる協会の発展、選手の育成等への尽力に対して、特別表彰を受けた。

昭和55年度

６月に当協会設立30周年記念式典とパーティーを、関係者を多数招いて滑川市民会館で開き、盛大に祝った。
栃木国体成年56kg級の八倉巻が６位、67.5kg級の高見が８位に入った。

昭和56年度

滋賀国体の八倉巻、高見ともに６位。
滑川高校の選手層が一段と薄くなった。

昭和57年度

島根国体で八倉巻、田村が90kg級でともに８位に食い込んだ。

昭和58年度

51年より会長を務めていた金山が退任、古栃一夫にバトンタッチした。

昭和59年度

奈良国体では八倉巻が８位、田村が４位になり、昨年の不振を挽回した。

昭和60年度

北信越高校大会で富山商業が団体で惜しくも２位。鳥取国体では52kg級の小路が８位、田村は７位となった。

昭和61年度

この年は不振で、北信越高校で110kg級の腰本(富商)が優勝、山梨国体で田村が８位に入ったのみだった。

昭和62年度

沖縄国体で高見が７位、田村が８位、少年82.5kg級の高浪が７位となる。
この年より全日本マスターズに参加した高見は初優勝した。

平成元年度

北海道国体で高浪７位、田村８位。

平成３年度

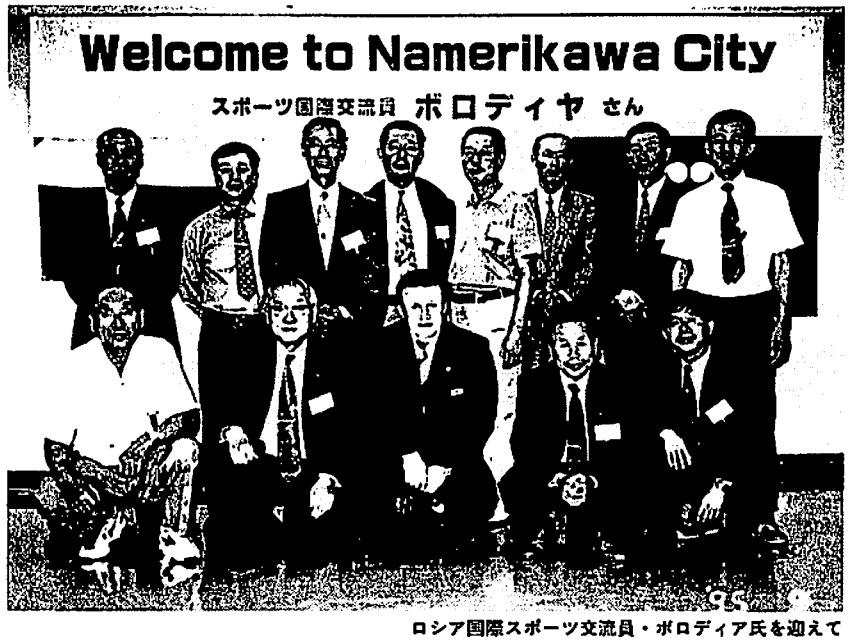
石川国体に審判として５名参加し、競技の運営に協力したが、入賞はならなかった。マスターズ大会で高見、由井、浜野の３名が優勝とよく頑張った。
静岡全国高校総体で90kg級の坂口(富商)が７位。
平６全国高校総体、2000年国体に向け準備も進み、大会の視察が始まった。

平成４年度

山形国体成年52kg谷野が８位、マスターズでは高見が６連勝を飾った。

平成５年度

徳島国体で成年99kg級の浅野が４位。
来年の富山全国高校総体に向け役員養成、選手育成に一段と拍車が掛かり、水橋高校陸上部員も競技会に出るようになった。



ロシア国際スポーツ交流員・ボロディア氏を迎えて

平成６年度

地元の富山全国高校総体には８名参加したがプレッシャーの為か、体調を崩す者が多く、59kg級で富商の安井が８位のみ。

愛知国体で安井６位、成年の高浪が８位、浅野が７位と久しぶりに賑わった。

2000年国体の視察があり、その対策に市役所、県準備委員会と協議した。

平成７年度

マスターズ大会で高見がＶ８、田村が91kg級で初優勝を飾った。

全国中学生大会に滑川中学校の双子の兄弟、中島が出場し６、７位入賞した。

後記

2000年国体開催が内定し、県準備委員会が準備局に格上げされ、各市町村でも本格的に取り組む所が出てきた。

４年後に迫った55回富山国体に向けて、ロシアより国際スポーツ交流員ボロディア氏を滑川市に、立命館大学OBの原を中学校より、滑川高校に迎えて選手の育成指導に協力して貰っている。本県は選手、協会員も少ないながら、平６全国高校総体運営で大成功を収めた実績を踏まえて、本番ではより良い結果を残したい。

〈現役員〉

会　　長　古栃　一夫
副 会 長　大西　久俊　上田　国義
　　曽根　善一　吉川　喬
顧　　問　金山　正治　石倉　伊吉
　　玉木　興正　魚躬喜代治
理 事 長　菅沼　義清
事務局長　神谷　潔
〃 次長　中川　秀世
審判部長　高木　正樹
競技部長　桜木　靖夫
強化部長　洩野　一昭
監　　事　小林　時雄　髙田　勇
理　　事　北川　宗次　由井　勝夫
　　髙畑　輝夫　髙儀　清
　　岩田　崇　川村　千年
　　上田　良弘　堀内　武志
　　寺島　清磨　金岡　裕一
　　須田　清　髙見　明男
　　元藤　芳則　浜野　松男
　　鳴川　守　二川　真二
　　中林　良滿　田村　雄次
　　小路　幸吾　奥田　昌義
　　田中　幸治　二口　久
　　井原　毅　作田　佳弘
　　金田　和博　山本　義夫
　　松本　清隆　八倉巻外光
　　谷野　伸二　原　学

石川県

事務局　〒921　石川県金沢市泉本町3-111　金沢高等学校内
長界　幸男　　TEL 0762-42-3321

歴代会長
初　代 米沢　外秋（昭和38年～）
第２代 山本　道生（昭和60年～）

〈沿 革〉

協会創立に至る経緯

昭和37年

金沢高校にウエイトリフティング同好会ができた。現在の金沢市丸の内の県営テニスコートの片隅にあった県体育協会の一室で練習をしていた。
岡田忠義、北川逸郎など部員は10名以上いて、指導は早稲田大学WL部OBの島田雄章が担当した。西野正次が顧問で、県体育協会の片桐寿美子がよく生徒のめんどうを見た。

昭和38年

金沢高校WL同好会は正式に部に昇格した。５月29日、石川県体育協会で、わずか７名の発起人の参加のもと、石川県ウエイトリフティング協会が誕生のうぶ声をあげ、県体育協会に加盟した。会長は米沢外秋、島田は初代理事長となり、競技面の指導は永江孝嗣(故人)と寺谷昭二(当時金市工教諭)事務面の協力は片桐寿美子と北国新聞に勤務していた山本道生であった。
夏、金沢高校WL部の初めての合宿が吉野谷村の浄光寺で実施された。

〈年次別概況〉

昭和39年

日本協会の五月女兵吾氏、早稲田大学の星野主将を招いて技術講習会を行なった。初めての県外試合に岐阜県土岐市へ行った。国体少年の部は東海北信越ブロックより一県５名の枠しかなく、大変な激戦だった。選手はB級牧野隆やL級沢田喬らの５名だった。
日本協会の遠藤滝軌氏を招いて審判講習会を実施した。初めて岐阜県土岐市の高校総体に参加した。
北陸３県大会を金沢市で開催した。石川県には試合用のプラットフォームも判定器もなかったので、富山県より全て借用してきた。
新潟国体で成年H級村隆介が８位に入賞した。石川県では初入賞だった。

昭和40年

加賀地方の県立小松工業高校にWL同好会が生まれ、翌41年には正式のクラブに昇格した。顧問は今村喜之祐。
能登地方では志賀町に、青年層を中心とした一般のWLクラブが誕生した。
県のスポーツ振興指定町に選ばれた機会に、盤持ちの伝統を現代に生かして、バーベルに取り組もうとしたようで、世話をしたのは町の社会教育課の柳沢平司であった。
早大の窪田登氏と日本協会の遠藤滝軌氏を招いて、技術講習会と審判講習会を実施した。大分県湯布院町の高校総体で金沢高校のM級沢田が、Ｓ大会新で入賞した。沢田は石川県の高校生として初めての総体入賞であった。

昭和41年

金沢高校に、プラットフォーム１面だけの、粗末な練習場が設けられた。第５代主将の西川栄一は、今まで流浪の練習だったが、自分の学校で練習できる最初の生徒たちの主将になった。
青森県黒石市の高校総体でL級西川が入賞した。大分国体ではLH級中村敏が入賞した。

昭和42年

北陸３県大会を金沢高校で開催した。
夏に小松工業と金沢高校の合同合宿を、小松市丸山で実施した。この合宿で小松工業は力をつけ、秋の選手権(現在の新人大会)で４階級を制して、はじめて金沢高校を圧倒した。

昭和43年

２代目理事長に岡田忠義が就任した。
島田は県WL協会副会長になった。
金沢市立工業高校にもクラブが誕生した。これで県内のウエイト実施校は３校になった。

昭和44年

金沢高校に新しい練習場ができた。
群馬県藤岡市の高校総体に小松工業高校が初出場した。

昭和45年

和歌山県串本市の高校総体へ小松工業が連続出場した。その中に、後に石川県WL協会を支える中島俊幸がいた。
金メダルの三宅義信氏に来てもらい、技術講習会を開き、コーチをうけた。

昭和46年

小松工業顧問は清丸亮一に代った。
徳島県鴨島町の高校総体でM級出口進は２年生ながら７位に入賞した。

昭和48年

西野が３代目理事長になった。副会長には島田に加えて岡田喜代三(１年で辞任)と中島幸一が就任した。
試合用プラットフォームの購入を知事に請願した。米沢会長の働きかけもあり、この申請は、１年後に実現した。
県体育協会に「競技力向上事業計画書」を提出し、強化合宿と招待試合に対して補助金の申請をした結果70,000円の強化費を受取った。
第１回北信越高校選手権大会が開催された。第１回大会は福井県坂井農業高校で実施された。持回りの優勝カップは福井県が寄贈した。
秋季大会を初めて川北町で開催した。中島俊幸は自宅に私財を投入して練習場を確保し、器材をそろえ、町の青年たちに開放した。川北町青年団を中心にWL部が産声をあげ、それが川北町WL協会となった。金沢市WL協会が発足し、金沢市体育協会に加盟した。

昭和49年

県春季大会と高校総体県予選を分離した。金沢高校の顧問が２名になり、長界幸男が追加就任した。

昭和50年

第22回北陸３県大会が福井県坂井町で開催された。この大会で、石川の高校の部は初めて優勝した。
金沢高校のM級中井は総体で入賞し、国体では表彰台に立った。

昭和51年

協会創立以来の功労者島田雄章が、副会長を辞任し、金沢を去った。

昭和53年

北陸３県大会の〈高校の部〉が25回大会を最後に廃止になった。

昭和54年

昭和60年に全国高校総体を石川県で開催することになり、WLにも、４月より専門部を設置した。初代専門部長は金沢高校校長の南俊郎、専門委員長には、西野が就任した。

昭和55年

山本道生が副会長に就任した。第27回北陸３県大会は富山県滑川市で開催され、この大会で北陸３県大会は一般の部も廃止になり、幕を閉じた。

６月末より毎週金曜日、金沢高校と川北町の中島宅で、交互に成年を中心に少年も交え、強化練習を開始した。この練習の結果、82.5kg級常深英登は全日本選手権で、90kg級菊田三代治は全日本社会人大会で入賞した。

昭和56年

60年高校総体の会場が珠洲市に内定した。県教委宛に指導者を珠洲市に派遣してほしい旨の書類を提出した。

島根県出雲市の全日本社会人で82.5kg級常深、90kg級中村敏、100kg級菊田三代治の３選手が全員入賞した。

昭和57年

金市工と小松工のWL部が消滅した。

前年からの陳情の結果、菊田が珠洲市へ移籍になった。高校教諭としての配置ではなく、教育委員会の所属で県民体育館への配属になった。

東京都の全日本選手権で82.5kg級常深と100kg級菊田はともに入賞した。

島根国体で、82.5kg級常深と100kg級菊田が入賞した。群馬県水上町の全日本社会人で、90kg級常深、90kg級中村敏、100kg級菊田が入賞した。

昭和58年

菊田は60年高校総体の会場地の珠洲市の二つの高校に、WL部を作るために人知れぬ努力を重ねた。高校進学の中学生を対象に部員獲得の努力を繰り返した。他方で、珠洲実業に、まだ部員がいないのにプラットフォーム４面の練習場建設工事に入った。

菊田の努力で、珠洲実業と飯田高校にウエイトリフティング部が誕生し、ともに６名づつの１年生が入部した。珠洲実業には平田朋彦が、飯田高校には田畑勇治が、顧問に就任した。

珠洲実業の練習場が完成し、落成式をかねて、金沢高校をまじえた３校の合同合宿を実施した。この落成式の時、高体連WL部の２代目専門部長に就任した久保今也が最初の挨拶をした。

金沢市内のホテルでWL協会関係者が集まり、創立20周年記念の式典とパーティを実施した。米沢会長や島田・岡田元理事長に感謝状を贈り、60高校総体の成功と協会の益々の発展を誓い合った。記念にバンフ程度の「思い出の記録」と九谷焼きの湯呑を用意した。

新潟県から高橋雅朝コーチを招いて３校の合同合宿をやった。珠洲実業で実施したこの合宿は、軽量級の高橋が、重量級の菊田とはひと味違うきめ細かな指導を行い、高校生のウエイトに対する考え方を変えさせた。それは石川県のウエイトの水準を飛躍的に向上させる出発点となった。

日本体育大学が珠洲実業で合宿をした。当時は、まだ器具が不足で、金沢からバーベルを運んで間に合わせた。この合宿が以後、珠洲を会場に繰り返される県外勢の合宿の最初だった。

群馬県水上町の国体で、少年75kg級新谷と成年100kg級菊田が入賞した。

奈良県下市町の全日本社会人で、90kg級中村英登は入賞し、100kg級菊田は県選手として初めて全国優勝をした。

この年からマスターズ大会が始まった。90kg級中村敏は初優勝を飾った。以後連続優勝を続ける。

２月に珠洲市WL協会会長杯記録会を実施した。翌年から能登地区大会として定着する公式大会の前身である。珠洲市にWL協会が発足し、初代会長には熊野豊彦が就任した。

昭和59年

珠洲市WL協会の熊野会長は、県WL協会の副会長に就任した。

県の第22回春季選手権大会と兼ねて第２回北信越社会人選手権大会を金沢で開催した。ブロック審判講習会も併せて実施し、講師に日本協会の野牧競技委員長を招いた。前野隆は飯田高校へ転勤し、WL部の顧問に就任した。

富山県滑川市の第12回北信越高校大会で団体の珠洲実業は初出場・初優勝の栄誉にかがやいた。

秋田県大館市の高校総体で82.5kg級新谷富志明、90kg級広瀬豊幸は入賞し、２人は奈良国体でも入賞した。

鳥取の全日本社会人で110kg級菊田は入賞し、マスターズの90kg級中村敏は２連勝した。

昭和60年

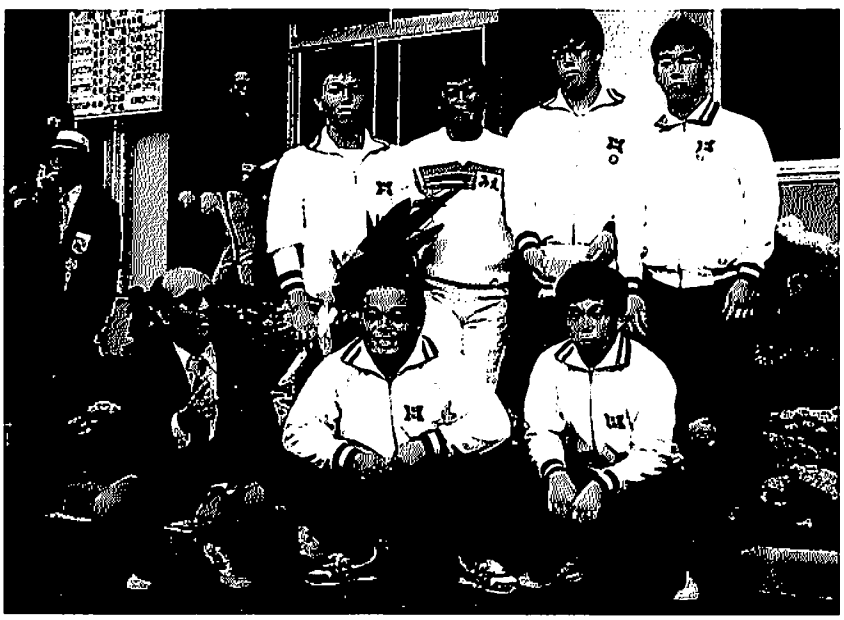
60総体の年を迎えた。総会前に米沢会長が辞意をもらし、新会長に山本道生を選んだ。３年間、教育委員会に所属して、60高校総体の成功のために努力してきた菊田が珠洲実業高校教諭に転勤になった。

全国高校総体を開催する年でもあり、協会の執行体制を強化するため、川北町の中島俊幸と珠洲市の菊田を、副理事長に昇格させた。さらに、常任理事制度をもうけ両中村・沢田・長界・平田朋彦などを常任理事とした。

春休みに菊田と長界は選手をつれて日本体育大学へ合宿に行った。専門委員長は毎週２日、泊り込みで珠洲市実行委員会へ出かける生活を続けた。

実行委員会では今までどこもやったことのない、競技記録をコンピューターに打ち込み、成績順に並べかえて印刷・配布する検討をし実行した。

事務的な仕事はアルバイトの女性が一人いるだけで、西野が毎週水木に仕事をするだけでは、とても高校総体の仕



昭和60年鳥取国体の県選手団

昭和60年全国高校総体で珠洲実業が団体優勝

事が追いつかなくなってきた。社会教育課長の山口秀一が、見かねて一緒に仕事をするようになった。
リハーサル大会として北信越高校大会を飯田高校で開催した。
団体は珠洲実業が2連覇を遂げた。
地元開催の高校総体が始まった。菊田を中心に強化に力を入れてきた成果が実った。初日から連日入賞者が写真入りで新聞紙上に大きく掲載され、大会は盛り上がった。連日、観客は会場いっぱいにあふれ、声援が飛び交った。
52kg級坂政晴、67.5kg級池本憲彦、75kg級又多裕一郎、82.5kg級新谷富志明、82.5kg級浜修一、90kg級広瀬豊幸、100kg級星山浩二が入賞した。珍しい現象だが金ゼロ、銅ゼロで、銀メダルだけ合計9個を獲得した。
団体では珠洲実業が、坂・新谷・広瀬に加えて56kg級兼政勝次で得点20点を獲得し、初の全国制覇をなし遂げた。
また、飯田高校も上記又多・浜に60kg級出口隆浩、90kg級浜屋茂雄で得点15点を獲得し、団体7位入賞になった。新谷と星山は日韓ユース代表に選ばれコーチの菊田と韓国の釜山を訪れた。
鳥取国体で成年60kg級池本茂、90kg級菊田、少年67.5kg級池本憲、82.5kg級浜、90kg級新谷は全員入賞した。新谷はSとTの日本高校新記録および大会新記録をマークした。
年度末の3月に第1回全国高校選抜大会が神奈川県藤沢市で開催された。56kg級坂政晴はS、J、Tでいずれも1位の完全優勝を果たした。82.5kg級浜屋茂雄と内村健一が入賞した。

昭和61年

60総体は終わった。6年後に石川国体が予定されている。協会の体制をより充実させねばならない。高体連の専門部長が珠洲実業校長の中野昭に、専門委員長は長界幸男に代わった。県協会副会長に谷口一夫を、副理事長に沢田喬・浜俊充を追加し、菊田は強化部長に専念することになった。
新潟北高校の北信越大会で珠洲実業は団体3連覇を達成した。
山口県下関市の高校総体で60kg級嶽がSで銅メダルになった。
山梨国体で、少年52kg級坂が優勝、82.5kg級内村、成年60kg級池本茂、90kg級菊田が入賞した。
沖縄の全日本社会人で実業団60kg級兼政は6位、マスターズ90kg級中村敏は大会記録で3連覇を遂げた。
第1回北信越高校合同合宿が冬休みになってから新潟北高校で開催された。新潟北高校の高橋雅朝氏の提案が支持され、最初から北信越5県が参加した。以後、今日まで続いている。
埼玉県上尾市の高校選抜に3名が参加し、82.5kg級藪下保は2位入賞した。

昭和62年

「石川県WL協会会報」の年4回定期発行がはじまった。B5版で8頁～24頁の会報で現在も続いている。
春季大会に愛知工業大学名電高校が、招待されて参加し、以後慣例化した。
長野県松本市の北信越大会で、珠洲実業が初めての4連覇を成し遂げた。
北海道士別市の高校総体で、珠洲実業は82.5kg級藪下と67.5kg級中西で13点を獲得し、団体6位になった。
沖縄国体には成年56kg級池本、90kg級菊田、少年75kg級藪下、82.5kg級江端貴が入賞し、合計28点を獲得した。
京都市大滝町の全日本社会人の女子トーナメントで、56kg級中山裕美子、67.5kg級東絵里子が入賞し、マスターズ90kg級中村敏は5連覇を達成した。
第2回北信越合同合宿を地元川北町で80余名が参加して行った。その時ブロックの高校選抜大会開催を呼びかけ、各県の賛同を得て、2月に珠洲市で5県の選手49名の参加で開催した。菊田がハンガリーのブダペストで開催されたパンノニアカップ国際WL大会にコーチとして参加し、引続きコーチ・クリニックにも参加した。
名古屋の高校選抜には4名が参加し江端と浅田浩伸が入賞した。
珠洲市に石川国体の準備委員会が設立され、運営役員の養成が始まった。

昭和63年

池本茂が専門指導員として、WL競技の指導に専念することになった。
福井県三国町の北信越大会で、金沢高校が、5連覇をめざした珠洲実業を2位に退けて初優勝した。
兵庫高校総体で、団体出場の金沢は52kg級釜崎健一、56kg級番井真一、60kg級大友卓矢、67.5kg級脇山周作が全員入賞した。82.5kg江端は金メダル3つの完全優勝を遂げた。江端は日韓ユース大会に菊田コーチと共に参加した。
北海道士別市のマスターズで、90kg級の中村敏は6連覇を達成した。中村は以後も優勝を続け、平成7年度で13連覇になるが以後省略する。
京都国体で少年82.5kg級江端が優勝し、60kg級大友、100kg級浅田、成年56kg級池本茂、90kg級菊田の入賞で天皇杯得点66点をかせいだ。
石川県WL協会創立25周年記念の式典と祝賀会を実施した。記念誌を発行し、記念品をつくり、優秀選手表彰規定をつくり、第1回授賞式を行った。以後毎年、授賞式を続けている。
兵庫県明石市の高校選抜で、90kg級刀祢徹は3位入賞した。

平成元年

2代目珠洲市WL協会会長に、中野昭が就任した。同時に県WL協会の副会長にも就任した。中野は菊田を全面的にバックアップして練習場を拡張し、池本(高倉)茂を採用、韓国合宿の企画を全面支援し、北信越高校WL大会の優勝旗を寄贈した。珠洲市WL協会の理事長は平田朋彦に替わった。同時に平田は県WL協会の副理事長になった。
平成3年に国体を控えて、日本海側では初めての全国高校選抜大会の開催を

明年度に誘致することにした。
富山県滑川市の北信越大会で珠洲実業が通算5回目の優勝をした。
徳島県上板町の高校総体で90kg級刀祢徹が入賞した。北海道士別市の国体では刀祢、60kg級中野透、成年60kg級坂で天皇杯得点29点を獲得した。
福岡県津屋崎町の全日本社会人56kg級で池本茂は3位入賞した。
山梨県日川高校の高校選抜で67.5kg級中野、90kg級堂七広治が入賞した。

平成2年

全日本社会人のリハーサル大会として位置づけた北信越高校大会を珠洲市で開催し、珠洲実業が2年連続6回目の優勝をした。2位は金沢高校だった。
宮城県村田町の全国総体で、60kg級坂東光司、67.5kg級中野、82.5kg級奥成済、90kg級堂七が入賞した。
専門部長の中野昭団長以下役員3名、選手16名が韓国へ遠征合宿をした。
福岡県津屋崎町の国体で、成年56kg級池本茂、90kg級菊田、110kg級浅田、少年67.5kg級中野、82.5kg級奥成、90kg級堂七が入賞し、天皇杯得点68点、団体7位に入った。
地元珠洲市で全日本社会人・全日本実業団・全日本マスターズ・記念女子大会を開催した。従来は一つの会場で実施していたが、はじめて2会場実施に踏み切った。56kg級池本が優勝、67.5kg級小畠敏和、75kg級又多、90菊田が入賞し、珠洲クラブは24点で団体5位になった。全日本実業団で60kg級一木勝次が、記念女子大会で60kg級源政美、60kg級堺智美と挽木好志美が入賞した。
第6回全国高校選抜大会を初めて地元金沢市で開催し、4名が出場したが、地元の入賞者はゼロだった。

平成3年

石川国体開催の年度である。全国高校選抜大会後、沖縄・愛知・新潟と合同合宿をやり、その前には韓国WL協会韓基豊ハンキプン副会長、梁武信ヤンムーシン監督を迎え、技術講習会を開いた。
高体連専門部長に寺田俊夫が就任した。
国体強化選手の編成は、すべて地元出身選手で行った。地元選手のUターン以外は、選手輸入をしなかった。
成年は韓国や自衛隊体育学校へ、少年は兵庫県明石市や韓国へ遠征合宿に出かけた。警視庁や法政大学、三重や沖縄の高校生が石川へ合宿に来た。
新潟県三条市の北信越大会で珠洲実業が3連覇を達成した。2位は金沢高校。
静岡県清水市の全国総体で52kg級長坂幸雄、56kg級岡田正伸、60kg級新村厚樹、67.5kg級飯塚佳之、90kg級梅本政裕が入賞し、学校対抗で珠洲実業が3位21点を獲得した。
石川国体を地元珠洲市で開催した。成年60kg級坂、82.5kg級江端、100kg級新谷、＋110kg級浅田、少年56kg級岡田、60kg級新村、67.5kg級飯塚の全員が入賞し、飯塚はJで優勝した。天皇杯得点79点で団体3位だった。
山形県羽黒町の全日本社会人で60kg級坂、90kg級江端、100kg級菊田が入賞した。千葉市の第7回高校選抜に4名が参加し、75kg級石谷直観、82.5kg級鵜田義継、90kg級栖隆寿が入賞した。

平成4年

石川国体が成功に終わり、新理事長に沢田副理事長が昇格、新副理事長には長界幸男が就任した。西野は辞任した熊野の後を継いで副会長に就任した。
長野県松本市の北信越大会で珠洲実業は2度目の4連覇を達成した。
宮崎県佐土原町の高校総体で珠洲実業の67.5kg級角谷昌史が優勝し、金沢の90kg級橘が入賞した。
山形県羽黒町の国体で成年＋110kg級浅田、少年67.5kg級角谷、75kg級石谷90kg級橘が入賞した。天皇杯得点23点
徳島県藍住町の全日本社会人で67.5kg級中野が入賞した。
協会創立30周年記念式典を盛大に挙行し、記念誌(B5判208P)を発刊し、記念品に九谷の湯呑茶碗をつくった。

平成5年

福井県三国町の北信越大会で珠洲実業は初の5連覇を達成した。
栃木県小山市の第40回高校総体で59kg級新田好行が入賞した。記念に山本・西野・中村敏・長界が表彰された。
韓国江原道WL連盟の崔誠桓チェソンハン会長以下役員5名高校生10名を迎え、地元高校生と珠洲市で合同合宿を行った。
徳島県藍住町の国体で成年76kg級浅井清治、108kg級浅田、少年64kg級浅井雄路が入賞した。
新谷富志明が26歳の若さで病死した。
茨城県石岡市の高校選抜に2名が参加し少年64kg級浅井雄路が優勝した。

平成6年

津幡高校にWL部ができ、顧問に高倉茂が就任した。柳田農高に同好会ができ、顧問に嶽桂輔が就任した。
東京都駒沢の全日本選手権で108kg級の浅田が入賞した。
富山県滑川市の北信越大会で珠洲実業は初の6連覇、通算10回目の優勝を果たし、監督の菊田は特別表彰を受けた。
富山県滑川市の高校総体で64kg級浅井がS、J、Tとも完全優勝した。
韓国江原道へ高体連専門部長米田担以下16名が遠征合宿した。
第16回日韓ユースWL大会を珠洲市で開催した。64kg級に浅井が出場した。日本チーム監督は菊田だった。
愛知県瀬戸市の国体で、成年108kg級浅田と少年64kg級浅井が優勝した。浅井は高校3冠王に輝いた。成年64kg級新村と少年59kg級山塚敬司、76kg級今井忍が入賞し、得点50点をあげた。
福島県いわき市の全日本社会人で70kg級中野が3位入賞した。
京都府亀岡市の高校選抜に3名が参加し、76kg級浦埜哲夫が入賞した。

平成7年

谷口副会長が辞任した。平田副理事長に代わって小畠敏和が就任した。高体連専門部長は谷口外夫に替わった。
初めて堺智美が女性公認審判になった。
埼玉県朝霞市の全日本ジュニア64kg級で浅井が優勝した。また、福島県いわき市の全日本選手権108kg級で浅田は3位入賞した。
石川県珠洲市の第23回北信越大会で珠洲実業は若狭東に破れ、連覇は6でストップした。同時に11連勝中の石川県勢の連勝もストップした。
鳥取県岩美町の高校総体で、76kg級浦埜哲夫が入賞した。
再び韓国江原道WL連盟の崔誠桓会長以下役員5名、高校生10名を迎え、地元高校生と金沢市で合同合宿を行った。
高校時代に3冠を達成して日本大学へ進学し、中国のアジアJrにも出場した期待の浅井雄路が18歳で逝去した。
福島県いわき市の国体成年108kg級浅田、少年76kg級浦埜が入賞した。
広島県東広島市の全日本実業団で、＋108kg級浅田が優勝し、54kg級中谷政晴、91kg級堂七が、女子大会で橋本宏美がいずれも表彰台に立った。

〈現役員〉

会長	山本	道生	
副会長	中島	俊幸	中野 昭
	西野	正次	明地 直之
理事長	沢田	喬	
副理事長	中村	英登	小畠 敏和
	長界	幸男	
常任理事	中村	敏	菊田三代治
	池本	忠雄	平田 朋彦
	髙橋	春夫	米沢 勲
	和気	洋一	髙倉 茂

福井県

歴代会長
初　代 稲葉　清嗣（昭和44年～）
第２代 斎藤毅綾太（昭和56年～）
第３代 吉田　慶三（昭和59年～）
第４代 中野　実典（平成２年～）
第５代 小林　良雄（平成５年～）

事務所　〒919-05　福井県坂井郡坂井町宮領57－5　坂井農業高等学校内
森川　浩一　TEL0776-66-0268

〈沿 革〉

協会創立以前

昭和36年７月頃から福井国体招致運動が始まり、各市町一種目招致ということで県保健体育課と協議の上、福井県で一番大きい坂井平野のほぼ中心地にある坂井町がウエイトリフティング競技の開催地に決定する。当時は全く福井県とは縁のなかった競技種目であり、トレーニング用のバーベルを町で購入し、地区の運動会などでデモンストレーションをして歩いたのが始まりである。翌37年春に協会設立総会を開き、その年の秋の第17回国体（岡山）には選手２名を出場させた。

協会設立は昭和37年４月８日で、その後、中央から遠藤滝軌先生をまねいて第一回の審判講習会を開き、審判員の養成を行ったり、三宅義信、義行兄弟や一ノ関、大内仁選手等を招致して実技指導をしていただいた。坂井町にある県立坂井農業高校を中心に福井農林高校、小浜水産高校、若狭農林高校などに部を作り、全国高校総体、福井国体のレベル向上に努力する。その成果あってか、昭和44年夏には全国高校ウエイトリフティング競技会（全国高校総体）で初優勝の快挙をなしとげ、続いて第23回福井国体で上位入賞を果たした。以来30有余年の間に全国的な各種大会に続々と入賞している。また協会では先の平成４年、協会設立30年を記念して協会創立30周年記念誌を発刊した。

〈大会別概況〉

国際大会

昭和51年４月10日、第一回アジア選手権大会（バンコク）で52kg級の白崎中徳（現姓・橋爪）がＳ92.5kg、Ｊ110kg、Ｔ202.5kg（２位）。

昭和54年５月５日、1979年日中友好ウエイトリフティング競技大会（青森県平賀町）で82.5kg級の森川浩一がＳ135kg、Ｊ160kg、Ｔ295kg（２位）。

昭和55年２月23日、第９回ブルースォード国際大会（東ドイツ・マイセン）の90kg級で森川浩一がＳ135kg、Ｊ160kg、Ｔ295kg（10位）。

全日本選手権大会

昭和44年７月６日、ＬＨ級で高島嘉弘がＴ420kgで３位。

昭和52年６月11日（岡山県倉敷市）、82.5kg級の森川浩一がＴ287.5kgで４位。

昭和54年５月26日（群馬県前橋市）、90kg級の森川浩一がＴ300kgで２位。

昭和55年９月６日（千葉県）、90kg級の森川浩一がＴ295kgで２位。

昭和57年７月９日（埼玉県上尾市）、90kg級の森川浩一がＴ292.5kgで４位。

全日本社会人大会

昭和40年５月29日、Ｌ級の島田三郎がＴ320kgで６位。

昭和41年６月４日、ＬＨ級の高島嘉弘がＴ360kgで４位。

昭和42年６月10日、ＬＨ級の高島嘉弘がＴ400kgで３位。

昭和43年５月４日、Ｍ級の島田三郎がＴ370kgで６位。ＭＨ級の高島嘉弘がＴ410kgで２位。

昭和47年11月17日（三重県）、Ｌ級の広瀬則夫がＴ362.5kgで５位。

昭和50年９月21日（長野県）、Fe級の上木弘次がＴ235kgで４位。

昭和53年11月11日（沖縄県）、52kg級の組頭健太郎がＴ192.5kgで４位。67.5kg級で辻義彦がＴ250kgで４位。90kg級の森川浩一がＴ285kgで２位。

昭和54年11月16日（栃木県）、90kg級の森川浩一がＴ302.5kgで１位。

昭和55年11月９日（滋賀県）、90kg級の森川浩一がＴ297.5kgで２位。

昭和56年11月６日（島根県）、90kg級の森川浩一がＴ297.5kgで３位。

昭和62年11月20日（京都府）、60kg級の小林与士夫がＴ200kgで５位。

平成２年11月16日（石川県）、67.5kg級の小林与士夫がＴ215kgで５位。

国民体育大会

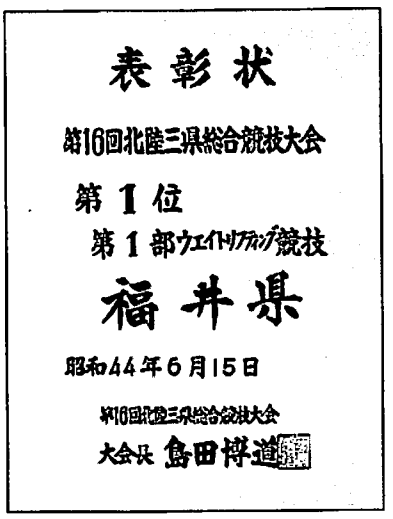
昭和46年第26回和歌山大会成年の部、ＬＨ級の高島嘉弘が６位。

昭和47年第27回鹿児島大会は入賞者なし。

昭和48年沖縄特別大会成年の部、Ｂ級

第24回長崎国体福井県選手団

の上木弘次が３位、Ｌ級の広瀬則夫が３位、Ｍ級の岡倉孝則が３位、ＬＨ級の岡田実が５位、ＭＨ級の佐治直哉が５位。
昭和48年第28回千葉大会成年の部、Ｈ級の佐治直哉が８位。
昭和49年第29回茨城大会成年の部、Ｌ級の岡倉孝則が７位。
昭和50年第30回三重大会成年の部、Fe級の上木弘次が８位。
昭和51年第31回佐賀大会成年の部、Ｆ級の組頭健太郎が７位、Ｂ級の白崎中徳が７位。
昭和52年第32回青森大会少年の部、75kg級の池野嘉比が３位。成年の部、52kg級の組頭健太郎が８位、82.5kg級の森川浩一が３位。
昭和53年第33回長野大会少年の部、52kg級の渡辺誠一が14位、60kg級の八田英広が13位、67.5kg級の佐々木嘉弘が14位。成年の部、52kg級の組頭健太郎が12位、67.5kg級の辻嘉彦が14位、82.5kg級の森川浩一が３位。
昭和54年第34回宮崎大会成年の部、90kg級の森川浩一が１位。
昭和55年第35回栃木大会少年の部、56kg級の杉山清嘉が８位。
昭和56年第36回滋賀大会少年の部56kg級の杉山清嘉が４位。成年の部、90kg級の森川浩一が４位。
昭和57年第37回島根大会成年の部、90kg級の森川浩一が５位。


表彰状
第16回北陸三県総合競技大会
第１位
第１部ウエイトリフティング競技
福井県
昭和44年６月15日
第16回北陸三県総合競技大会
大会長 島田博道

昭和58年第38回群馬大会成年の部、90kg級の森川浩一が４位。
昭和59年第39回奈良大会成年の部、90kg級の森川浩一が５位。
昭和60年第40回鳥取大会少年の部、56kg級の松葉昌和が９位。
昭和61年第41回山梨大会成年の部、110kg級の有城博一が９位。
昭和62年第42回沖縄大会少年の部、90kg級の柴田栄雄が７位。成年の部、110kg級の有城博一が９位。
昭和63年第43回京都大会少年の部、52kg級の白崎智敬が９位、90kg級の柴田栄雄が２位。成年の部、110kg級の森川浩一が８位。
平成元年第44回北海道大会少年の部、52kg級の吉次公男が６位、75kg級白崎勝行が９位。成年の部、100kg級の森川浩一が９位、110kg級の柴田栄雄が７位。
平成２年第45回福岡大会少年の部、52kg級の吉次公男が４位、82.5kg級辻大尚が６位。成年の部、110kg級の柴田栄雄が８位。
平成３年第46回石川大会少年の部、56kg級の吉次公男が１位。成年の部、110kg級の柴田栄雄が７位。

〈現役員〉

会長	小林 良雄		
副会長	田中 利一	尾川 一	
	浦谷 忠弘		
理事長	渡辺 彦典		
副理事長	島田 三郎		
理事	高山甚三郎	広瀬 直和	
	広瀬 則夫	南 利治	
	森本 信二	田中 幹夫	
	山本 恒博	渡辺 誠一	
	中嶋 邦明	坂井 英治	
	組頭健太郎	前野 光信	
	橋爪 中徳	小川 利成	
	畠中 実	赤崎 六治	
	池野 友彦	八田 英広	
監事	畑川 精作	小林与士夫	
事務局	森川 浩一		

静岡県

事務局　〒424　静岡県清水市折戸3-20-1　東海大学工業高等学校内
金沢　徳夫　TEL0543-36-1062

歴代会長
初　代 藤井　厚男（昭和30年～）
第2代 吉野　倫将（昭和32年～）
第3代 佐藤　清一（昭和34年～）
第4代 兼岩　元城（昭和37年～）
第5代 鈴木　巻六（昭和47年～）
第6代 平賀　利夫（昭和49年～）
第7代 長田徳太郎（昭和53年～55年）
第8代 松前　　仰（昭和59年～）

〈沿　革〉

協会創立以前

昭和20年代は、競技者はほとんどいない状態で、力自慢の人、体力づくりでバーベルを挙げる程度の人がいるだけであった。その当時は、バーベルといっても汽車の車輪に鉄棒をくっつけたり、コンクリート製のプレートを使用したバーベルであり、手製の粗末なものであった。

協会創立に至る経緯

静岡国体まで2年あまりの昭和30年、県内各地の重量挙げ愛好者たちが、静岡県にも協会をつくろうと呼びかけ、昭和30年10月に吉野道正（伊東市）等県内有志が伊東市に集まり、静岡県ウエイトリフティング協会を結成した。ついで日本ウエイトリフティング協会並びに静岡県体育協会に加盟申請をし、事務局は伊東市に置き、次のとおり役員が就任した。

会　長　藤井　厚男（伊東市）
副会長　吉野　倫将（富士宮市）
理事長　吉野　道正（伊東市）
理　事　長谷川昭吾（富士市）
　　広沢　　巡（焼津市）
　　山崎　治郎（静岡市）
　　稲葉　正実（伊東市）
　　平賀　利夫（佐久間町）
　　中島　邦雄（浜松市）
　　井原　一夫（伊東市）

しかし、協会は設立したものの、肝心な競技用バーベル等の器具はなく、それに加え、指導者がいない状態であった。そこで当時愛知県において第一線で競技者として活躍していた佐久間町出身の平賀利夫（第8回国体L級優勝）に要請し、平賀の自前のバーベルと指導で県内各地を東奔西走してもらい、ウエイトリフティング競技の普及を図った。協会を設立したばかりで、この年の第10回国体には書類不備のため選手を送り出すことができなかった。

〈年次別概況〉

昭和31年

協会設立後、初めて選手を送りだしたのは、5月27日、宇都宮市スポーツセンターにおいて開催された第16回全日本ウエイトリフティング選手権大会で、L級平賀利夫が第1号であった。翌年開催される静岡国体では競技種目が一部返上されるという情報が流れ、その中にはウエイトリフティング競技も含まれていた。そこで、日本ウエイトリフティング協会の井口幸男理事長他関係役員が開催要請のために来静し、富士宮市、伊東市を訪問して、ぜひ開催されるようにと働きかけたことや、県協会の吉野倫将副会長をはじめ役員の強い熱意が静岡県当局を動かし、日本鋼管をはじめ関係団体の支援により清水市での開催が決定した。

昭和32年

(1)　第12回国体開催

3月10日、清水市において理事会が開催され、日本鋼管関係者を含む新役員を次のとおり決定した。

会　長　吉野　倫将（富士宮市）
副会長　野山　郁造（清水市）
　　吉野　道正（伊東市）
理事長　柴　　亀吉（清水市）
事務局　大野　哲資（清水市）
（理事省略）

開催決定により、協会関係者による選手育成と競技普及の努力が始まり、県下各地に支部をつくる一方、国体開催にあわせ指導者講習会、審判員養成講習会を数回にわたり実施した。また、7月の全日本ウエイトリフティング選手権大会に選手を送るとともに、競技会運営状況を視察するために役員を派遣した。

協会として国体に選手を送り出すのは初めてのことで、代表選手の選考は2度の予選会により、次のとおり決定した。

監　督　岩本　和美（日本鋼管）
選　手
F　級　沼田　慶三（伊東高）
B　級　三輪　定広（佐久間高）
Fe　級　長谷川昭吾（富士市）
L　級　平賀　利夫（佐久間町）
M　級　鈴木　達也（伊東高）
LH級　中村　一哉（自衛隊小山）

昭和32年10月26日第12回国体が開幕、ウエイトリフティング競技も27日より清水東高校体育館に全国の精鋭を集めて開催した。本県平賀の力強い選手宣誓により、4日間にわたる熱戦の火ぶたが切られた。本県選手団の成績は、L級に出場した平賀利夫3位、LH級中村一哉8位入賞と健闘した。国体が無事に成功したことは創立したばかりの県協会にとって大きな自信と力となった。

(2)　静岡県スポーツ祭初参加

第11回静岡県スポーツ祭にウエイトリフティング競技が正式種目として認められ、県内初の競技会が、5月19日清水市公会堂において、約30名の選手が参加して開催された。記録的にはM級平賀選手を除き低調であったが、県内初の競技会として大変意義深いものであった。

(3)　東海四県大会開催

東海地区のウエイトリフティング競技の発祥は愛知県の中京クラブである。このクラブから育った選手が出身県に戻り、活躍していた中、10月の国体開催中、愛知県、三重県、岐阜県、静岡県の四県で競技会を開催しようと地元静岡の平賀利夫が提案し、国体終了後東海四県のウエイトリフティング競技関係者が集まり、東海四県におけるウエイトリフティング競技の普及発展と親睦を深めることを目的として東海ウエイトリフティング連盟を結成した。競技会は各県持ち回りとし、第1回大会は静岡県で開催することになった。大会会場は佐久間町中部公民館で、県会議員武田茂六をはじめ佐久間町挙げての協力により、43名の各県代表選手

昭和32年静岡国体、県選手団(中央一岩本監督)

により熱戦を展開し、愛知県が第1回優勝を手にした。この大会では高校生ながら、M級で出場した伊東高校の鈴木達也が高校新記録をマークした。

昭和33年

3月の理事会で次のとおり、新役員を選任した。

会　長　吉野　倫将(富士宮市)
副会長　宮城　邦夫(日本鋼管)
　　吉野　道正(伊東市)
理事長　柴　　亀吉(清水市)
(理事略)

7月31日より、秋田県山王体育館において開催された、第5回全国高校総合体育大会に静岡高校、伊東高校が初参加した。

10月23日より富山県滑川中学校体育館において開催された第13回国体には、M級平賀利夫、H級中村一哉(自衛隊小山)がそれぞれ5位に入賞する健闘をした。

昭和34年

3月の理事会で新役員を、次のとおり選任し、事務局は清水市から伊東市に移り、伊東市役所内に置いた。

会　長　佐藤　清一(伊東市)
理事長　平賀　利夫(佐久間町)
事務局　原　　政雄(伊東市)
(理事略)

6月4日岐阜県土岐市土岐津小学校で開催された第3回東海四県大会には、13名の選手を送り、各階級に好成績を挙げ、本県は初優勝を飾った。

この年、高校ウエイトリフティング競技が高校体育連盟に正式加盟し、第7回静岡県高校総合体育大会に参加した。

第1回静岡県ウエイトリフティング競技大会を8月30日、佐久間町佐久間小で行った。

10月26日より東京で開催された第14回国体において、M級平賀利夫、H級中村一哉が3位に入賞するとともに他の選手もよく健闘し、総合成績8位と協会設立以来、初の天皇杯得点を獲得した。この大会でFe級に出場した三輪定広(佐久間高)はSで90kgの日本高校新、J120kgの高校タイ記録をマークした。

昭和35年

第15回国体では、MH級で辻宗治が5位に入賞しただけで、他の選手の記録は低調であった。

昭和36年

5月21日、静岡市城内小で開催した第15回静岡県スポーツ祭において、M級三輪定広(明大)は、S117.5kgの日本タイ記録をマーク、10月の第16回秋田国体では120kgの日本新記録を樹立し、3位に入賞した。

また、県内各地にクラブがつくられ、競技者の技術力量の向上がみられた年であった。

昭和37年

3月の理事会において、次のとおり新役員を選任し、事務局は静岡市に移した。

会　長　兼岩　元城(静岡市)
副会長　堀沢　嘉彦(佐久間町)
　　深沢　　潔(静岡市)
理事長　平賀　利夫(佐久間町)
事務局　沢入　育男(静岡市)
(理事略)

静岡市八幡町に兼岩元城会長等が中心となり、県下初の一般用の練習場を作り、競技の普及発展に大きく役だった。

6月24日、東京台東区体育館で開催された第22回全日本ウエイトリフティング選手権大会で、M級に出場した三輪定広は3位に入賞し、世界選手権代表に選ばれ、9月、ハンガリー・ブダペストで開催された世界選手権に出場し、11位の成績を挙げた。また、2年後の東京オリンピックの有力な候補選手となり、翌年には強化選手として各種の合宿練習に参加した。

昭和39年

東京オリンピックが開催される年を迎え、5月17日伊東市伊東西小で開催した第18回県スポーツ祭には参加選手が70名近くにのぼり、ウエイトリフティング競技への関心が深まってきた。

8月27日、岩手県江刺市で開催された第23回全日本選手権及び東京オリンピック最終予選会にM級で出場した三輪が2位に入賞し、大会終了後の選考会において栄えあるオリンピック日本代表に選ばれた。

10月14日東京オリンピック・ウエイトリフティング競技3日目、三輪は多くの本県協会関係者の見守る中でM級Aグループに出場し、P120kg、S132.5kg、J170kg(日本新)を挙げ、堂々5位に入賞した。

オリンピック選手の誕生は本県ウエイトリフティング史上大きな足跡を残すとともに若い選手の目標となった。

昭和42年

2月、高校生を対象とした初の講習会が、講師に金子矩久氏を(明大)迎えて吉原工業高校で開き、技術向上に大いに役立った。

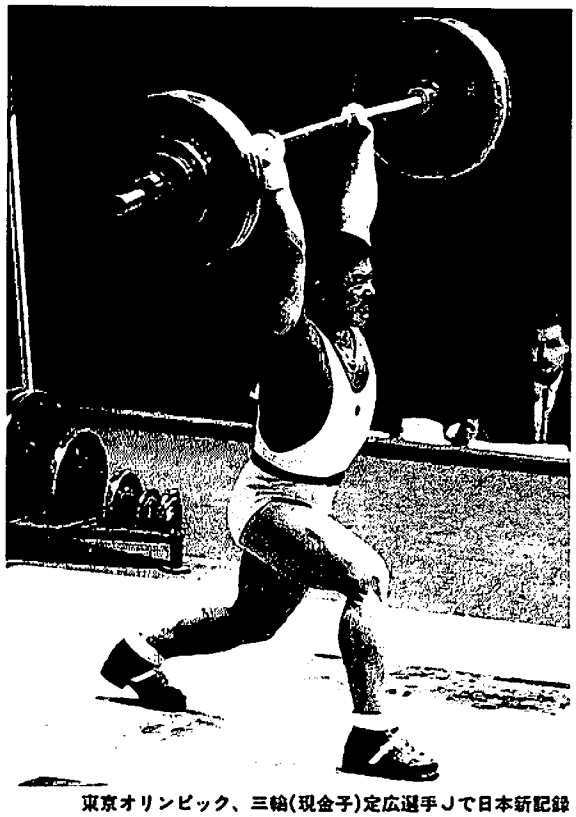
5月、第21回県スポーツ祭の参加選手は100名を越え、福井県での全国高校総体では本県選手が多く入賞した。高校はようやく全国的なレベルに達した。

昭和44年

8月2日群馬県藤岡高校で開催された第16回全国高校総体F級に出場した玉井昇治(東海大工高)はP75kg、S82.5kg、J107.5kgを挙げ、初優勝を飾った。これは本県ウエイトリフティング史上初の高校チャンピオンの誕生で、協会関係者を喜ばせるとともに玉井は将来の大選手となる片鱗を見せた。この功績で静岡新聞スポーツ優秀選手賞を受賞した。

昭和45年

10月の第25回岩手国体にB級で出場した滝戸篤(静岡商教諭)は、第16回秋田国体以来10年連続出場を果たした。高



東京オリンピック、三軸(現金子)定広選手Jで日本新記録

校生を指導しながらの10年連続国体出場は賞讃に値するものである。
この年、競技高校は沼津学園高校を加え9校となった。

昭和47年

3月の理事会において、10年にわたり会長を務め、本県のウエイトリフティング競技普及発展に尽力された兼岩元城会長が退任、新しい役員を次のとおり選任した。

会　長　鈴木　善六(清水市)
理事長　滝戸　　篤(清水市)
事務局　大庭　一馬(清水市)
(理事略)

昭和48年

7月28日、鈴木善六会長が急逝された。
10月の第28回千葉国体には、亡き会長の子息でFe級で出場した鈴木誠(中京大)は遺影を持って開会式の行進をした。会長不在のまま国体に参加した本県選手団は、亡き会長への餞とばかり健闘し、B級玉井昇治が初優勝、F級坪井彰、MH級鈴木誠司がそれぞれ5位に入賞するなど、総合8位入賞を果たした。玉井の優勝は国体での県協会設立以来初の優勝であった。この年はP種目がなくなった年でもあった。

昭和49年

3月の理事会で新役員を次のとおり、選任した。

会　長　平賀　利夫(佐久間町)
理事長　滝戸　　篤(清水市)
事務局　大庭　一馬(清水市)
(理事略)

8月、北九州市での第21回全国高校総体にL級に出場した平岡力(東海大工高)が、2年生ながら初優勝を飾った。

昭和50年

7月の第35回全日本選手権において、B級で出場した玉井昇治(静岡市)がS110kg、J140kgの好記録で初優勝を飾り、9月16日モスクワ市レーニンスタジアムで開催された世界選手権に出場したが、Jで失格してしまった。
8月、山梨県日川高校において開催された第22回全国高校総体での東海大工高チームの活躍はめざましく、B級古屋哲男、M級平岡力が優勝、F級佐野政晴が3位入賞し、学校対抗準優勝となった。
10月の第30回三重国体でも高校生が活躍し、B級古屋、M級平岡両選手が全国高校総体に続き優勝、高校2冠に輝き、Fe級佐野も4位入賞を果たした。一般も玉井が2位に入賞するなど健闘し、総合成績6位と県協会史上最高の成績を収めた。

昭和51年

2月の県公式記録会において、高校M級平岡がJ150.5kgの日本高校新記録をマークした。
4月、藤沢市において開催されたモントリオール・オリンピック最終予選会である第36回全日本選手権大会では、B級優勝の筆頭にあげられ絶好調だった玉井は、Sでつまずき、2位に5kg差の4位となり、オリンピック出場を逃した。Fe級には鈴木誠が出場し、4位と健闘した。両選手は6月10日、ソウルで開催された日韓対抗に出場し、良い成績を収めた。
6月6日よりポーランド・グダニクス市で開催された第2回ジュニア世界選手権大会において、B級古屋が7位、M級平岡が8位という成績を収めた。
11月5日、横浜市で開催された第2回日中親善大会にはB級で出場した玉井が優勝を飾った。

昭和52年

3月18日、ソビエト・ビルニューススポーツセンターで開催されたソ連国際友好杯大会に日本代表として60kg級に出場した玉井昇治(県営草薙体育館)は、世界の強豪相手に堂々5位の入賞を果たし、5月の県スポーツ祭において、Jで日本記録に5kgとせまる150kgの県新記録をマークした。
7月9日よりブルガリア・ソフィア市で開催された第3回ジュニア世界選手権大会において、56kg級古屋哲男(法大)が4位、75kg級平岡力(明大)も8位入賞する健闘を見せた。
7月29日、フィリピン・マニラ市において第1回国際アジア選手権大会が開催され、48kg級に佐久間一也(中京大)が出場し、S75kg、J90kg、T165kgで優勝した。国際大会での優勝は県協会史上初の快挙であった。
10月の第32回青森国体には7人出場し、5人が入賞した。

昭和53年

3月の理事会で会長に清水市議会議長長田徳太郎が就任するなど、新役員を次のとおり、選任した。

会　長　長田徳太郎(清水市)
理事長　滝戸　　篤(清水市)
事務局　大庭　一馬(清水市)
(理事略)

第33回長野国体では、成年の部60kg級玉井が6位、75kg級平岡が5位、+110kg級鈴木勝(鈴誠商店)が4位と成年の部は健闘を見せたが、高校生が不振に終わり、天皇杯得点は獲得できなかった。
10月26日より、ハンガリー・ブダペストで開催されたパンノニア大会には日本代表として玉井が出場し、4位入賞を果たした。

昭和54年

10月の第34回宮崎国体では56kg級玉井が6年ぶりに優勝し、60kg級古屋哲男は、3年ぶりの国体出場にもかかわらず7位に入賞、75kg級平岡、+110kg級鈴木は4位入賞し、成年の部3位、総合6位と好成績であった。

昭和55年

7月3日長田徳太郎会長(清水市議会議長)が急逝し、清水市入江小講堂で葬儀がしめやかに営まれた。
10月の第35回栃木国体では、52kg級佐久間4位、56kg級玉井4位、82.5kg級平岡2位、+110kg級鈴木3位と成年は昨年に引き続き健闘したが、高校生の不振により天皇杯得点は獲得できなかった。

昭和56年

5月の第41回全日本選手権大会兼第16回日韓親善大会において、82.5kg級に日本代表として出場した平岡が初優勝した。また、6月札幌市において開催された日中友好大会においても82.5kg級で優勝を飾った。
平岡は、8月、名古屋市で開催された第13回アジア選手権大会において82.5kg級3位、J180kgで銀メダルを獲得した。
10月の第36回滋賀国体では、成年52kg級佐久間3位、82.5kg級平岡2位、+110kg級鈴木3位と上位入賞を果たしたが、優勝候補の一角であった56kg級玉井が失格し、悲願の成年の部優勝は夢と終わった年であった。

昭和57年

5月9日、東海大工高において第1回静岡県ウエイトリフティング選手権大会を開催した。
10月の第37回島根国体において、52kg級佐久間3位、56kg級玉井5位、82.5kg級平岡初優勝、+110kg級鈴木4位と大健闘し、成年の部初優勝を飾った。総合でも、4位と国体での県協会史上最高の成績を残した。
この年、第42回全日本選手権、第19回社会人選手権、82.5kg級平岡が優勝し、9月ユーゴスラビア・リュブリアナでの第36回世界選手権に出場し13位の成績を収めた。5月、韓国での第17回韓日親善大会52kg級に日本代表として出場した佐久間は初優勝を飾った。

昭和58年

7月の第43回全日本選手権大会に90kg級で出場した平岡は初優勝を飾った。
8月名古屋市での全国高校総体では、90kg級佐藤定勝(沼津学園高)が5位、100kg級遠藤秀(吉原工高)が7位に入賞しただけで全体に不振であった。
10月の群馬国体では82.5kg級平岡が2年連続の優勝をはじめ、成年選手は全員入賞し7位であったが、高校生が不振に終わり天皇杯得点を獲得できなかった。

昭和59年

3月の理事会において、4年間空白であった会長に衆議院議員松前仰が就任するなど新しい役員を次の通り選任した。

会　長　松前　　仰(清水市)
理事長　滝戸　　篤(清水市)
事務局　井出　哲夫(富士市)
(理事略)

4月、第44回全日本選手権大会兼ロサンゼルス・オリンピック代表選考会が埼玉県上尾市で開催され、減量して75kg級で出場した平岡力は優勝したが、オリンピック代表は見送られ、最終選考会となった5月の国際スポーツフェアにおいて失格し、オリンピック出場に涙をのんだ。
8月、秋田県での全国高校総体では、67.5kg級の太田直志(東海大工高)の準優勝をはじめ、4人が入賞した。
10月、第39回奈良国体では82.5kg級平岡(清水市消防署)の優勝をはじめ、成年、少年ともに出場した選手全員が入賞を果たし、総合4位の好成績を残した。

昭和60年

6月、日中友好大阪大会に、82.5kg級日本代表として出場した平岡は準優勝、日中友好鳥取大会に52kg級で出場した佐久間一也(浜松市今井小)は優勝した。
8月、石川県珠洲市での全国高校総体において60kg級で出場した春野広樹(吉原工高)はS2位、J2位、T3位と健闘した。
10月の第40回鳥取国体では、7人出場し、5人が入賞を果たしたが優勝候補の一角であった60kg級春野の失格などがあり、天皇杯得点獲得に至らなかった。

昭和61年

4月5日、中国・常州市にて日中友好大会が開催され、90kg級日本代表として平岡が出場したが、2位に終わった。
5月の第46回全日本選手権、10月の山梨国体において90kg級優勝を飾る。
8月、第33回全国高校総体は山口県下関市で開催され、60kg級小林尚(沼津学園高)が4位、90kg級杉山和孝(東海大工高)が6位と健闘したが全体的に成績は不振であった。

昭和62年

3月21日、県公式記録会を東海大工高で開催し、100kg級溝口敏男(吉原工高)が、Sで128.0kgの日本高校新記録をマークした。
3月27日第2回全国高校選抜大会において、67.5kg級に出場した小林尚(沼津学園高)はS110kg、J130kg、T240kgで初優勝を飾った。
7月の第47回全日本選手権大会において90kg級に出場した平岡は、4年ぶり2度目の優勝を、10月の第42回沖縄国体でも90kg級で、2年連続優勝を飾った。

昭和63年

5月、東京において第24回ソウル・オリンピック大会代表選考会が開催され、本県からは82.5kg級に平岡が出場し健闘したが、怪物砂岡の壁は厚く、2位となり、ロサンゼルス・オリンピックに続き、苦杯をなめた。
8月の全国高校総体、10月の京都国体とも本県勢は不振だった。

平成元年

8月、徳島県上板町で開催された第36回全国高校総体において、本県沼津学園チームは大健闘し、+110kg級白橋和久が優勝、67.5kg級安田義信が優勝者と同記録ながら体重差で3位、60kg級水上崇選手が4位、56kg級大津行範が2年生ながら8位に入賞するなど学校対抗準優勝であった。昭和50年の東海大工高以来実に14年ぶりの快挙であった。10月の国体は成年は大学生中心で臨み、上位入賞を狙ったが優勝候補の白橋が失格し、下位に止まる。
8月25日の韓国での第11回日韓ユース大会に日本代表選手として白橋選手が出場したが2位に終わった。

平成2年

3月の理事会において、新役員が次のとおり決定した。

会　長　松前　　仰(清水市)
理事長　鈴木　善久(清水市)
事務局　井出　哲夫(富士市)
(理事略)

全国高校総体を1年後に控え、滝戸篤(清水工高教)が中心となり準備に向け、慌ただしい年であった。
10月の第45回福岡国体において+110kg級溝口敏男(日大)は、J193kgを挙げ、大学新記録で種目優勝した。
12月、埼玉県立スポーツセンターで開催された第36回全日本大学対抗選手権大会において本県出身の82.5kg級杉山崇(日大)、+110kg級溝口敏男(日大)が共に優勝を飾り、2年連続6度目の日大総合優勝に大きく貢献した。

平成3年

8月2日より5日の4日間にわたり、本県清水市日の出センターにおいて第38回全国高校総体が「感動は、いっしょうけんめいの、熱い風」のスローガンのもとに開催した。昭和32年の国体以来の全国大会であり、高体連、協会一体となって大会の成功に向け尽力した。大会終了後、快適な会場、適切な運営等大会関係者からお褒めの言葉をいただき、役員一同苦労が報われた思いであった。
地元開催であったが、参加選手の成績は75kg級佐野哲也(沼津学園高)が、6位入賞を果たしただけで、他の選手は不振に終わった大会でもあった。
7月の全日本選手権大会において、

＋110kg級に出場した溝口はＪ201kgの日本新記録で優勝した。
10月の第46回石川国体において成年82.5kg級Ｔ330kgの好記録で杉山崇が、＋110kg級ではＴ350kgの大会新で溝口敏男がともに初優勝した。
12月、茨城県で開催された第23回アジア選手権大会に82.5kg級日本代表で出場した杉山崇は３位に5kg差の４位で銅メダルを逃した。

平成４年

４月、中国でのアジア選手権大会には本県から82.5kg級杉山崇、＋110kg級溝口敏男の両選手が日本代表として出場し、バロセロナ・オリンピック標準記録突破を狙ったが、杉山４位、溝口はＪで失格し、オリンピック出場の望みは絶たれた。
10月の山形国体は少年60kg級植松英治（沼津学園高）３位、52kg級杉澤淳（沼津学園高）がＳ４位、成年82.5kg級杉山が２位、67.5kg級水上崇（日体大）が７位と健闘した。絶好調であった＋110kg級溝口はＳ160kgで優勝した。得意のＪで国内で初めて200kgからスタートしたが、腰を痛めて失格したのが響き、上位入賞ができなかった。

平成５年

３月の理事会で次のとおり新役員を選任した。

会　長　松　前　　仰（清水市）
理事長　井　出　哲　夫（富士市）
事務局　金　澤　德　夫（清水市）
（理事略）

第58回静岡国体内定
平成15年に２巡目の第58回静岡国体の開催が内定した。
８月の第40回全国高校総体では、59kg級杉山正浩（御殿場西高）が５位、91kg級岩崎宇信（沼津学園高）が３位に入賞した。
10月の第48回東四国国体おいて、少年59kg級杉山が５位、91kg級岩崎がＪ147.5kgの日本高校新記録を出し３位、99kg級太田健一（東海大工高）がＪで３位、Ｔ５位と健闘した。
成年も64kg級水上崇（日体大）が６位、70kg級渡辺良男（法政大）が６位、83kg級杉山崇がＳ142.5kg、Ｊ177.5kg、Ｔ320kgの日本新記録で２回目の優勝、＋108kg級溝口がＴ360kgの日本新記録で優勝するなど、全員が入賞し、総合成績４位という素晴らしい成績を残した年であった。
〈女子リフターの登場〉
ウエイトリフティングに興味を持ち、沼津学園高の勝亦憲一の指導のもと高校２年生の途中から競技を始め、本年静岡県で初めての女子リフターとして井出智子（日大三島高）が登場した。
この年、溝口がスポーツ分野での輝かしい功績でバロセロナ・オリンピックで水泳平泳ぎ200m金メダルを獲得した岩崎恭子とともに静岡県教育委員会表彰を受けた。
階級変更がされた年でもあった。

平成６年

１月第42回静岡新聞・ＳＢＳ静岡放送スポーツ賞に、平成５年の国体で成年83kg級杉山崇、＋108kg級の溝口敏男の両選手が受賞した。
広島アジア大会最終予選会を兼ねた第54回全日本選手権大会において、83kg級杉山崇（オサコー建設）は日本記録で優勝し、アジア大会出場の切符を手に入れた。
＋108kg級溝口はＪで失格し、無念の涙をのんだ。
広島でのアジア大会に多数の本県協会関係者の見守る中で出場した杉山は４年前の雪辱を期し、３位以内の入賞をめざして健闘したが、７位に終わる。
10月の国体では成年＋108kg級で出場した溝口が静岡県選手団の旗手を務めた。83kg級杉山が２連覇、＋110kg級溝口が５位、少年83kg級高橋陽正（沼津学園高）が３位、59kg級堀江俊光（沼津学園高）が６位と健闘したが、総合成績は上位入賞に至らなかった。

平成７年

５月30日、静岡県国体準備委員会総会で平成15年の第58回静岡国体の競技別開催地ウエイトリフティング競技は清水市に決定した。
３月の全国選抜大会では108kg級石野泰央（清水工高）が３位に入賞。
６月の県高校総体で沼津学園高校が、各階級とも上位入賞者を多数輩出し、学校対抗15連覇を果たした。沼津学園高の勢いは県内ではまだまだ止まりそうもない。
８月の全国高校総体は、沼津学園高の59kg級前地良真が３位、64kg級保坂徹が６位、83kg級工藤基弘が７位、91kg級水口英信が４位と活躍し、沼津学園高が学校対抗４位となる。99kg級の石野は６位に終わった。
７月15日ポーランド・ワルシャワにおいて開催された第21回ジュニア世界選手権には岩崎宇信（法政大）が99kg級に出場し14位に終わる。
10月の第50回福島国体において、成年83kg級杉山が３連覇。＋108kg級溝口は３位、少年59kg級前地が４位、91kg級水口が４位、99kg級４位と健闘したが総合成績の上位入賞に至らなかった。

〈現役員〉

会　　長　松前　　仰
副 会 長　望月　厚司　滝戸　　篤
理 事 長　井出　哲夫
理　　事　勝亦　憲一　平岡　　力
　　金子　矩久　鈴木　　勝